

修士学位請求論文

H. G. ブルーマーのシンボリック相互作用論における
「行為者と社会との関係」再考

東北大学文学研究科社会学専攻

学籍番号 94M40

桑原 司

凡例

1. 出典の明記については、以下の形式で行っている。

: 邦書ならびに邦訳文献に関しては、著者、出版年、参照・引用箇所順で記してある。

例 船津衛、1976年、『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣、20頁
→ (船津、1976年、20頁)

: 洋書に関しても、著者、出版年、参照・引用箇所順で記してあるが、邦訳のあるものに関しては、その最後尾に邦訳の該当箇所を記してある。尚、引用の訳文は必ずしも邦訳によらない。

例 Blumer, H. G., 1969, "Symbolic Interactionism" Prentice-Hall, p. 2 (H・ブルーマー著、後藤将之訳、1991年、『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法—』、劉草書房、2頁)
→ (Blumer, 1969, p. 2、邦訳2頁)

: また、リプリント版を使用している場合には、著者、出版年、リプリント版出版年、リプリント版における参照・引用箇所順で記してある。

例 Blumer, H. G., 1977, Comment on Lewis, "The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism", *Sociological Quarterly*, vol. 18, pp. 285-289 [in Hamilton (ed.), 1992, pp. 152-157] → たとえば、この論文のp. 153を参照している場合
→ (Blumer, 1977 [1992, p. 153])

: また、同一著者の異なる文献を続けて参照している場合には、邦書、邦訳、洋書の如何に関わりなく、以下のような出典明記を行っている。

例 船津衛、1976年、『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣、ならびに、船津衛、1983年、『自我の社会理論』、恒星社厚生閣、20頁を参照している場合。

→ (船津、1976年、1983年、20頁)

: 尚、参照した文献はすべて、本論末尾に「参考文献リスト」として一括して掲載している。

2. 引用文中の〔〕で囲まれてあるところは、引用者による補足を表す。また、引用文中の……は、引用者による中略を表す。

3. 引用文中の『』は、引用文献が邦書または邦訳である場合には「」を、また引用文献が洋書である場合には””を表す。

4. 本論文の註は、本論の末尾に一括して掲載している。

H. G. ブルーマーのシンボリック相互作用論における
「行為者と社会との関係」再考

目次

第一章 本研究の視点

第一節 シカゴ・ルネサンスとハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論(1)

第二節 社会学の根本問題とブルーマーのシンボリック相互作用論(3)

第二章 ブルーマーのシンボリック相互作用論と主観主義批判

第一節 ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論的立場(1969年の立場を中心に)(6)

第二節 ルイスによる主観主義批判(18)

第三章 主観主義を越えて

第一節 ルイスに対するブルーマーの反論(21)

第二節 「トークバック」論の導入(25)

第四章 「動的・過程的」なものとしての「社会」(35)

「あとがき」(42)

註(48)

参考文献リスト(62)

1頁=1200字(40字×30行)

第一章 本研究の視点

第一節 シカゴ・ルネサンスとハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論

第一次世界大戦から、1930年代の中頃までの約20年間のアメリカ社会学の歴史は、事実上、シカゴ大学社会学科の歴史として描くことが出来る。このことについてL・コーザーは次のように述べている。「第一次世界大戦から1930年代の中頃までの約20年間のアメリカ社会学の歴史は、大部分、シカゴ大学社会学科の歴史として書くことが出来る、といっても過言ではないだろう。この間、同学科は、社会学的研究の一般的潮流を方向付け、社会学の唯一の専門雑誌を発行した。また、社会学科にその足跡を残し、アメリカ社会学協会の会長になったほとんどの社会学者はここで教育を受けた。同学科の教授たちは、もっとも影響力のあるモノグラフや教科書を書いた」(コーザー、1981年、91頁)。しかし、シカゴ学派のいわゆる「黄金時代」は、その1930年代中頃までであり、特に、T・パーソンズ(Parsons, T.)の構造機能主義(structural functionalism)社会学が、アメリカ社会学のメインパラダイムへの道を歩むにしたがって、シカゴ学派は急速に衰退の一途を辿ってゆくことになり、次第にアメリカ社会学界から忘れられてゆくこととなった(吉原、1994年、53、73頁)。しかし、近年このシカゴ学派が再び社会学界のステージに復活を遂げようとしている。「シカゴ学派の知的遺産の再発見」ないしは「シカゴ・ルネサンス」なる用語の出現がそれを表している。戦後数十年に及ぶシカゴ学派の空白の時代の後にたち現れた「シカゴ学派の知的遺産の再発見」なる動き(フェアリス、1990年、16頁)は、吉原によれば、「ポスト・パーソンズの社会学の一潮流に棹さしていることに加えて、現代社会学のフロンティアの領域と多様に交叉する可能性を包蔵している」という点で、「シカゴ・ルネサンス」と呼ばれるにふさわしいものであるという(吉原、1994年、53頁)。この「シカゴ・ルネサンス」には、「二つの流れ」がある。そのうちの一つにあたるのが、ハーバート・ジョージ・ブルーマー(Blumer, H.G., 1900-87)に代表される「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism)⁽¹⁾に他ならない(吉原、1989年、24頁)。

では、何故にこのシンボリック相互作用論は、「シカゴ・ルネサンス」の一翼に位置づけられているのであろうか。それに対する吉原の回答は、このシンボリック相互作用論が、

G・H・ミード(Mead, G. H., 1863-1931)の思想の継承と復活を試みているものであるからとするものであった(吉原、1994年、54頁)。またこのような考え方は、従来より種々の論者によって認められているものでもある(船津、1976年、1989年、1993年、1995年)(宝月、1984年、1990年)。ブルーマーがシンボリック相互作用論を展開するにあたって、もっとも重視したのがミードの思想であり、その中でもとりわけ、ミードの「自我」(self)に関する理論的フレームワークを、ブルーマーは継承したとされている(船津、1976年、34頁)⁽²⁾。

このようなブルーマーのシンボリック相互作用論が、「ポスト・パーソンズの社会学の一潮流に棹さ」すに際して、その一学派としての主張を、「理論」と「方法論」の両側面においておこなったことは今や周知のことである。「方法論」的な側面においては、従来、社会学において支配的であった自然科学的方法を批判し、その方法に代わる、新たな社会学独自の方法を発展させようとした(船津、1976年、68-77頁)。また、「理論」的な側面においては、パーソンズの社会学に描かれている(とブルーマーを含めたシンボリック相互作用論者が想定する)「人間と社会との関係」を批判し、「人間と社会との関係」に関する新たな理論的パースペクティブを展開しようとした(船津、1976年、11-19頁)。

本稿では、ブルーマーのシンボリック相互作用論がもつ、このような二つの側面(「理論」と「方法論」)のうち、「理論」の側面に焦点を絞って、以下、論を展開してゆくことにしたい。というのも、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「方法論」とは、ブルーマーがこの「理論」において描いているとする、「行為者が日常的におこなっていること」を、洗練させたものに他ならないからである⁽³⁾。そのため、その「方法論」の原型を探るという意味でも、まずもってこの「理論」を検討することが必要になるのである。次節では、我々が如何なる視点からブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」を検討するかを明らかにしたい。

第二節 社会学の根本問題とブルーマーのシンボリック相互作用論

社会学の成立以来現在に至るまで、「人間と社会との関係」を如何に捉えるかという問題が、社会学の根本問題として位置づけられてきたといっても決して過言ではない。とはいえ、山崎によれば、まさにこの「人間と社会との関係」を如何に捉えるかに関して、「過度の分極化の傾向」が今日までの社会学史に存在してきたという（山崎、1993年、65頁）。すなわち、一方に「過度に個人主義的な社会学的営み」を押し進めるものと、他方に「過度に社会（中心）主義的な社会学的営み」を押し進めるものという、二つの傾向が存在してきたのである。たとえば、スペンサーの功利主義的個人主義に対するデュルケムの批判は、過度に個人主義的な人間観という問題性に向けられていたし、その後のパーソンズの社会学に対するロング(Wrong, D.H.)の「社会化過剰の人間観」(the oversocialized conception of man)批判(Wrong, 1970)は、過度に社会（中心）主義的なものとして受けとめられた人間観という問題性に向けられていたと言えるであろう（山崎、1993年、66頁）。ブルーマーのシンボリック相互作用論は、この後者の批判と軌を一にしつつ、「人間と社会との関係」ないしは「行為者と社会との関係」に関する新たな理論的立場を構築しようとしたものなのである。ではブルーマーは「人間と社会との関係」をどのように捉えようとしたのか。

ブルーマーがシンボリック相互作用論の「理論」において捉えた「人間と社会との関係」は、まず何よりも、構造機能主義社会学が想定する「人間と社会との関係」に対するアンチテーゼとしての特徴をもっていると言える。日本において、シンボリック相互作用論の社会学理論を「もっとも精密に、体系的に論じている」（江原、1986年、64頁）と目されている船津によれば、「従来の社会学」（明らかにパーソンズを中心とする構造機能主義社会学のことを指している）が、社会学理論における「人間と社会との関係」を、「社会」が一方的に「人間」を規定するものとして捉えていたのに対して（船津、1993年、56頁）、ブルーマーのシンボリック相互作用論では、「人間」を、「社会」に一方的には規定されない「主体的存在」として捉え、また、「社会」というものを、その「主体的存在」たる「人間」によって形成される「動的・過程的」なものとして、社会学理論における「人間と社会との関係」を捉えようとしているという（船津、1976年、20頁、260頁、1993年）。ここで「主体的」とは、船津によれば、「人間」が、刺激に対して、ただ単に反応する存在ではなくして、それらを自らの「解釈過程」ないし

は「自己相互作用」過程を通じて、解釈し、修正し、再構成しうる存在であることを表している（船津、1995年、5-7頁）。では、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、そのような「人間」が如何にして「社会」を形成するとされているのか。換言すれば、田中（田中、1971年、328-329頁）がブルーマーのシンボリック相互作用論を指しているところの「生きた具体的な諸個人の日常生活の『内がわ』からその主体性を論理化し、これを根底に据えた社会理論を構築しようとする思想的努力」ないしは「『個人』から『社会』を説明しようとする発想」とは如何なることを意味するのか。これを、「『個人』から『社会』を説明」というそのやり方を、全面に押し出したことがその最大の意義であるとされる、ブルーマーのシンボリック相互作用論（船津、1976年、11-19、31-32、260-266頁）にそくして明らかにしようとするのが、本稿の主たる目的である。

その目的を遂行するに際して、我々は、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、その柱石としての位置づけを有している「自己相互作用」(self interaction)概念に着目する。この「自己相互作用」という概念は、単にブルーマーのシンボリック相互作用論においてのみ重要性をもつものではなく、ミード「自我」論において種々の論議をまきおこしている「主我」論争⁽⁴⁾を解決する上で、最も有効な概念であるとの評価もなされているものである⁽⁵⁾。

しかしながら、このような位置づけを有する「自己相互作用」概念の内実を、さらに詳細に議論しようというのが我々の本稿における主たる目的ではない。むしろ我々の目的は、この「自己相互作用」概念を、「人間」によって形成されるものと（ブルーマーのシンボリック相互作用論において）されている「社会」との関わりにおいて論じ、その「社会」が「動的・過程的」である（船津、1993年、45、55頁）所以を、この「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに説明することにある。では何故に、そのような説明をおこなう必要があるのか。それは、この「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに「社会」の「動的・過程的」たる所以が説明されうるものでなければ、結局のところ、この「社会」の作動原理を、その「社会」それ自体のメカニズムに帰着させてしまうことになるからである。ところが、このような立場はまさにブルーマーが批判したものであった。ブルーマーは、「社会」というものを「それ自体の原理にしたがって作動」する「一種の自己作動的な実体」ないしは、「一つのシステムとしての性質を有する」ものとして認識する立場を、「重大な誤りである」として痛烈に批判している(Blumer, 1969, p-

p.19-20、邦訳24-25頁)。ブルーマーによれば「〔ある社会の〕ネットワークや制度は、〔その社会が有する〕何らかの内的な原理やシステムの要件とにかよって、自動的に機能するわけではない。それが機能するのは、さまざまな位置にいる人々が何らかの事をおこなうからなのである。そして、彼らが何をおこなうかは、彼らが自らの行為状況を〔自己相互作用を通じて〕如何に定義するか次第なのである」(Blumer, 1969, p. 20、邦訳25頁)。このようなブルーマーの立場⁽⁶⁾を説得的に呈示するためにも、「社会」の「動的・過程的」たる所以を、「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに説明しなければならないのである。それ故本稿では、「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに「社会」の「動的・過程的」たる所以を説明することで、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」における「『個人』から『社会』を説明しようとする発想」の内実を明らかにすることにしたい。

しかし我々には、その内実を明らかにするに先だって、克服しなければならない二つの批判がある。ブルーマーのシンボリック相互作用論は、「自己相互作用」をおこなう「主体的人間」をもとに、「社会」の「動的・過程的」なあり方を明らかにしたところに、その理論的意義なり、それ独自の特性があるとされている(船津、1993年)。しかしこのような特性をもつとされるブルーマーの「理論」には、それが「主観主義」的であるという批判がかねてから寄せられている(Lewis, 1976)。また一方で、「動的・過程的」な社会観を説いたはずのこの「理論」の社会観が、結局のところ「現状維持的」、「安定的」、「統合的」な性格を有することになってしまったとの批判も寄せられている(船津、1976年、30頁)。そこで本稿では、続く第二章では、第一章で仮説として提示したブルーマーの「理論」の特性を、実際にブルーマーの著作にそくして検討するとともに、そのブルーマーの「理論」に対してかねてから寄せられている「主観主義」批判の内実を明らかにし、続く第三章においてその「主観主義」批判の克服をめざしたい。そして第四章では、このブルーマー「理論」の社会観が「現状維持的」、「安定的」、「統合的」な性格を有しているとする批判の克服を試み、その結果として、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」において、「社会」が「動的・過程的」である所以を、「自己相互作用」概念との確固たる結びつきのもとに論じることにしたい。

第二章 ブルーマーのシンボリック相互作用論と主観主義批判

第一節 ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論的立場（1969年の立場を中心に）

ブルーマーのシンボリック相互作用論に関する代表的な著作が、『シンボリック相互作用論』(Blumer, 1969)であることはもはや言うまでもない（後藤、1991年、273、274-275頁）が、この著作の第1章「シンボリック相互作用論の方法論的な立場」に描かれているように、ブルーマーのシンボリック相互作用論は三部構成をとっている (Blumer, 1969, pp. 1-60、邦訳1-77頁)。そのことについて、ブルーマーは以下のように述べている。

「私の〔本書第1章における〕論述方針は、まず最初にシンボリック相互作用論の特性を素描し、次に経験科学における方法論的な原理を明らかにし、最後にシンボリック相互作用論の方法論的な立場を明確にすることである」(Blumer, 1969, p. 2、邦訳2頁)

第1部「シンボリック相互作用論の特性」では、シンボリック相互作用論の立場に立つブルーマーが、研究対象としての「経験的世界」(empirical world)を分析する際に用いる分析枠組、ないしは、シンボリック相互作用論の「ルートイメージ」の数々(root images)に関して議論がなされている(Blumer, 1969, pp. 1-21、邦訳1-27頁)。続いて第2部「経験科学における方法論的な原理」では、「経験科学」(empirical science)を志す者なら、誰もが遵守しなければならないとする経験科学の要諦に関する議論、ならびに、その要諦から導き出された経験科学の理想的な研究手法としての「自然的探求〔法〕」(naturalistic inquiry)に関して議論がなされている(Blumer, 1969, pp. 21-47、邦訳27-60頁)。そして第3部「方法論的オリエンテーション」(「シンボリック相互作用論の方法論的な立場」)では、もし研究者が、シンボリック相互作用論の「ルートイメージ」を分析枠組として採用し、その上で「自然的探求」をおこなうとすれば、その研究者は如何なる方法論的な立場に立つことになるかが論じられている(Blumer, 1969, pp. 47-60、邦訳60-77頁)。このうち、従来の日本におけるブルーマーのシンボリック相互作用論に関する研究において、もっとも多かったのが「ルートイメージ」、すなわちブルーマーのシンボリック

相互作用論の「理論」に関する議論であった（那須、1995年a、43頁）。本稿の検討対象となるのも、先に述べた理由により、この「ルートイメー」である。

ブルーマーのシンボリック相互作用論の「ルートイメー」を論じるに際して、必ずと言ってよいほど議論の中心におかれるのが、「自己相互作用」(self interaction)という概念である。この「自己相互作用」という概念は、ブルーマーの「ルートイメー」においては、その中心理念ないしは柱石としての位置づけをもつものであった（ウォーラス・ウルフ、1985年、299頁）。さらにこの概念があるからこそ、ブルーマーのシンボリック相互作用論は、彼独自の社会的・社会心理学的パースペクティブとして、そのアイデンティティを確保しているといっても過言ではない。ブルーマーによれば「シンボリック相互作用論というパースペクティブは、……人間の行為を研究する上で、自己相互作用の過程を何よりも重要なものとする唯一の分析枠組なのである」（Blumer, 1993⁽¹⁾, p.191）。したがって、ブルーマーのシンボリック相互作用論を論じるにあたって、この概念の説明を欠くわけにはゆかない。以下では、この概念を論じるにあたって、必ずと言ってよいほど援用される三つの基本的な前提を手がかりに、この概念を説明してゆくことにしよう。ブルーマーの人間観や行為観、そして社会観も、この三つの前提に依拠して構成されている（進藤、1990年、79頁）。

ブルーマーは『シンボリック相互作用論』（Blumer, 1969）の第1章の冒頭において、シンボリック相互作用論が依拠している三つの基本的な前提を以下のように述べている（Blumer, 1969, p. 2、邦訳2頁）。

- 1) 人間は、ある物事(thing)がその人自身に対して有する意味(meaning)に基づいて、その物事に対して行為する。
- 2) そのような物事の意味は、その人間が相手とともにとりおこなう社会的相互作用(social interaction)から導出される、ないしは発生する。
- 3) その〔物事の〕意味は、その人間が、その人が出会った物事に対処する際に、その人が用いる解釈の過程〔=自己相互作用の過程〕によって、操作されたり修正されたりする。

まず、第一の前提についてであるが、ブルーマーによれば、この「物事」には、人間が自らの環境の中で気にとめるであろうあらゆるものが含まれている（Blumer, 1969, p. 2、邦

訳2頁)。そして、その「物事」がその人間に対して有する「意味」に基づいて、人間はその「物事」に対して行為するわけであるが、裏を返せば、その「物事」の「意味」の如何が、その人間の「物事」に対する行為の様式の如何を設定しているということになる(Blumer, 1969, p. 11、邦訳13頁)。さらに、その人間の行為の様式が、その「物事」と、その人間との「関係性」(relationship)を設定することになるとブルーマーは考えている(Blumer, 1993, p. 179, 181)。

次に第二の前提は、そのような「物事」の「意味」が、如何なる形式で発生するのかを説明している。この第二の前提が意味することは、ある人間にとっての「物事」の「意味」とは、その「物事」に関して、相手すなわち他者が、その人間に対して行為するその行為の様式から生じてくるということである。つまり、その人に対する他者のその行為が、その人間にとっての「物事」(の「意味」)を「定義」(define)するように作用するということなのである(Blumer, 1969, pp. 4-5、邦訳5頁)。そして、ここで把握されたその人間にとっての「物事」と「意味」のセットが、ブルーマーが言うところの「対象」(object)を構成する(Blumer, 1969, pp. 68-69、邦訳87-89頁)。これをブルーマーは、便宜上、「物質的対象」(physical object)(木や椅子や自転車など)、「社会的対象」(social object)(学生、僧侶、大統領、母、友人などといった他者や、その他者達の諸活動、さらには学校や政府などといった制度・機関など)、「抽象的対象」(abstract object)(道徳的原理、哲学学説、社会学学説、正義、同情など)という三種に分類している(Blumer, 1969, p. 2, 10-11、邦訳2、13-14頁)。さらに、その人間を取り巻く「世界」(world)とは、もっぱらこの「対象」のみから構成されるものであるとブルーマーは考えている(Blumer, 1969, pp. 10-11、邦訳13-14頁)。しかしながら、ここで他者によって「定義」された「物事」の「意味」を、その人間は、そのまま自らの行為の指針として機械的に採用するとブルーマーは見ているわけではない。ブルーマーによれば「人々による意味の使用が、このようにして〔第二の前提に描いたような形式で〕導き出された意味を、単に適用することにすぎないと考えるのは誤り」なのである(Blumer, 1969, p. 5、邦訳6頁)。そこで登場するのが第三の前提である。

ブルーマーが三つの基本的な前提の中でもとりわけ重視するのが、この第三の前提である(Blumer, 1969, p. 5、邦訳5-6頁)。すなわち、他者によってもたらされたその人間にとっての「物事」の「意味」は、その人間によってそのまま自動的に適用されるのではなく、それは必ず、その人間の「自己相互作用」の過程を経て、操作されたり修正されたりする

という点をブルーマーは強調しているのである(Blumer, 1969, p. 5、邦訳5-6頁)。さらに、この「自己相互作用」の過程における操作や修正を経て「確定」(ascertain)された、その人間にとっての「物事」の「意味」は、その人間のその後の行為の「指針」(guidance)を与える「道具」(instrument)として、その人間を導くことになる(Blumer, 1969, p. 5, 20-21, 66、邦訳6、26-27、84頁)。ここで、その人間のその後の行為が、その「道具」が与える「指針」に沿ってなされるということは、その「道具」すなわち「意味」が、その人間のその後の行為の様式を設定しているということに他ならない。ということは、さらにその結果として、その人間とその「物事」との「関係性」をも(ということは、その人間にとっての「対象」(object)ならびにそれから構成される「世界」(world)との「関係性」をも)、その「意味」が設定することになっていると言える。以上、ブルーマーのシンボリック相互作用論の三つの基本的な前提を吟味する限り、人間とその世界との間に如何なる「関係性」が設定されるかは、結局のところ、その人間の「自己相互作用」の過程に委ねられるという知見が導出されることになる(下田、1987年、64頁)。

ところで、この「自己相互作用」とはいったい如何なる形式で営まれるとブルーマーは考えていたのか。それを以下に論じてゆくことにしよう。

ブルーマーによれば、「自己相互作用」とは別名「自分自身との相互作用」(interaction with oneself)ともいわれ(Blumer, 1969, p. 62、邦訳79頁、1993, p. 164)、それをブルーマーは「文字どおり、個人が自分自身と相互作用をおこなっている過程」(Blumer, 1993, p. 186)であると表現している。すなわち、他者との間でおこなう社会的相互作用を自分自身とおこなうのが、換言すれば、他者との社会的相互作用を個人の内に内在化(internalize)させたものが、ブルーマーのいう「自分自身との相互作用」ないしは「自己相互作用」というわけなのである(Blumer, 1969, p. 5, 14、邦訳6、18頁)。では他者との間でおこなう社会的相互作用とは如何なるものであるとブルーマーは考えていたのか。

ブルーマーは、「社会的相互作用」という概念を説明するに際して、それを二つの形式に分けている。一つは「ノン・シンボリック」(ないしは「非シンボリック」)(non-symbolic)な相互作用であり、もう一つは「シンボリック」(symbolic)な相互作用である。前者は、行為者が他者の行為を解釈することなく、その他者の行為に対して直接的に反応しているという形式で営まれるもので、後者は、そこにその行為者の解釈が介在している場合の相互作用を指す(Blumer, 1969, pp. 8-9, 65-66、邦訳10-11頁、84頁)。この後者の形式の相互作用に関してより詳細に述べれば、シンボリックな相互作用には「解釈」

(interpretation)と「定義」(definition)とが含まれている(Blumer, 1969, p. 66、邦訳84頁)。

「解釈」とは、他者の行為や言及の「意味」を確定(ascertain)することであり、「定義」とは、他者がどう行為すべきかに関する「指摘」(indication)を他者に対しておこなうことである。このうち「解釈」は、先に議論した三つの基本的な前提のうち、第三の前提の含意に相当する。そして「定義」は、第二の前提の含意に相当する。但し、注意しなければならないことは、先の第二の前提では、「定義」すなわち「指摘」が向けられるのは他者ではなく、ある行為者であり、その「指摘」をおこなうのはその行為者ではなく、他者であったという点である。ブルーマーが研究上重視するのは、このシンボリックな形式の相互作用の方であることはいうまでもない。さらにブルーマーの場合、先の三つの基本的な前提に関する我々の議論と、上述の「解釈」(interpretation)と「定義」(definition)についての議論を鑑みても明らかなように、「物事」の「意味」を創出させる「社会的相互作用」と言えば、それは、このシンボリックな形式の社会的相互作用を指すことになる。

先に議論したシンボリック相互作用論の第二の前提では、他者が、ある行為者にとっての「物事」に関して、その「行為者」に対して行為をおこなっていた。そのような他者によるその「行為者」に対する行為が、その「行為者」にとってのその「物事」を「定義」するように作用するものとされていた。しかし、この命題において注意しておきたいことは、その他者にとっては、その「行為者」が、その他者にとっての<対象>(object)(<意味>(meaning)を付与された<物事>(thing))だということである。というのは、その他者は、その「行為者」に対して行為しているのであって、その「行為者」にとっての「物事」に対して行為しているわけではないからである。つまり、その他者は、その「行為者」という(その他者にとっての)<物事>が、自分(その他者)にとってもつ<意味>に基づいて、その「行為者」(=その他者にとっての<物事>)に対して行為しているはずであって、その「行為者」にとっての「物事」の「意味」に基づいて、その「物事」に対して行為している訳ではないということなのである。換言すれば、ここでの他者にとっては、<物事(=その「行為者」)>の方が、その他者の行為が向けられている「対象」(object)になっているのであって、「物事」が、その他者の行為が向けられている「対象」(object)になっているのではないのである。先に議論した第一の前提は、「人間は、ある物事(thing)がその人に対して有する意味(meaning)に基づいて、その物事に対して行為する」というものであったが、この命題を応用すれば、より一層上記のことが明らかになる。すなわち、「その他者(=人間)は、その『行為者』(=ある物事(thing))が自らに対し

て有する意味(meaning)に基づいて、その『行為者』(=その物事)に対して行為」しているわけなのである。

ある「行為者」と他者との間の社会的相互作用がこのようなものであるとするなら、ここでの「行為者」が内在化された社会的相互作用＝「自分自身との相互作用」をおこなうということは、その「行為者」が、「自分自身」をその「行為者」にとっての「対象」(object)とし、その「行為者」自身が、その「対象」としての「自分自身」に対して行為(「定義」活動)をおこなうということの意味することになる。ということは、一般論として、人間は「自分自身との相互作用」ないしは「自己相互作用」をおこなうに先立ち、まず「自分自身」をその人間自身にとっての「対象」としておかなければならないことになる(自己対象視、ないしは自己対象化)。ブルーマーによれば、このようなある人間にとっての「自分自身」という「対象」も、「他の対象と同様に・・・他者がその個人を、その個人に対して定義するという社会的相互作用の過程から生じる」(Blumer, 1969, p. 12、邦訳16頁)。さらに、このような定義活動をおこなう「他者」の「役割」を、その人間自身が内在化することによって、「個人が自分自身に対して話しかけ、そしてそれに対して応答するというコミュニケーションの一形式」(Blumer, 1969, p. 13、邦訳17頁)としての「自分自身との相互作用」ないしは「自己相互作用」をおこなうようになる。ブルーマーは述べている(Blumer, 1969, p. 13、邦訳16頁)。そこでブルーマーは、その内在化のメカニズムを、ミードの「役割取得」(role-taking)の議論を踏まえ、以下のように説明している。

「彼〔ミード〕の指摘によれば、〔ある個人が〕自分自身にとっての対象になるためには、個人は自分自身を外側から見なくてはならない。このことは、自分自身を他者の位置に置き、そして〔そこから〕自分自身を見ること、すなわち、そこから自分自身に対して行為することによってのみおこなわれうるものである。」(Blumer, 1969, p. 13、邦訳16頁)

続けて、ブルーマーはこの「役割取得」を、ミード同様に(Mead, 1934, p. 138, 150-151, 155、邦訳149、161-163、166頁)三つの段階、すなわち、(1)具体的な個人の役割を取得する「プレイ」(play)の段階、(2)具体的な組織化された諸個人の役割を取得する「ゲーム」(game)の段階、(3)抽象的なコミュニティー全体の役割を取得する「一般化された他者」(generalized other)の段階に分け、これら「三種類の役割のいずれかを取得す

ることによって、・・・他者がその個人をその個人に対して定義するように〔その個人がその個人自身をその個人に対して定義して〕、自分自身を自らの対象とする」と述べている(Blumer, 1969, p. 13、邦訳16頁)。そして人間は、以上のような形式で、「自分自身」を「対象」とすることによって、自分自身と相互作用をおこなう(interact with oneself) (=「自己相互作用」をおこなう) ことができるとブルーマーは考えていたのである。

(Blumer, 1969, p. 13、邦訳16頁)。

ここまでの議論で明らかになったことは、「自己相互作用」とは、人間が自分自身に対して、(内的に) 定義活動をおこなうことを意味していたということである。すなわち、他者がその人間に対しておこなっていた(外的な) 定義活動を、その人間が内在化し、その人間自身が自分自身に対して(内的に) 定義活動をおこなうのが、「自己相互作用」だったのである⁽²⁾。

それでは、以上のような、「自己相互作用」のメカニズムを駆使して自らの行為を形成し、自身と世界との間に一定の「関係性」を設定することが出来る存在としての「人間」は、如何にして「社会」を形成するのであるだろうか。この点を追求するのが、次の課題である。すなわち、ここに来てようやく「『個人』から『社会』を説明」するとは、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては如何なることを意味するのかを解明することになる。

ブルーマーによれば、「人間の社会」(human society) (=「人間の集団生活」(human group life)) とは、それを構成する諸個人の行為から成り立ち、その行為を単位として成立する(exist in action)という(Blumer, 1969, p. 6、邦訳7-8頁)。しかし、ただ単に諸個人の行為が複数集まれば、そこに社会が形成されるとブルーマーは見えていたわけではない。すなわち、社会とは、諸個人の行為の単なる寄せ集めなのではない(Blumer, 1969, p. 17、邦訳21頁)。そうではなく、その複数の行為が互いに適合し合う(fit together)、ないしは相互に接合(articulate)されることによってのみ、そこに社会が形成されていると言える、とブルーマーは考えていたのである(Blumer, 1969, p. 17、邦訳21頁)。その場合、ここでいう「社会」とは、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、諸個人が、各々の行為を相互に接合することによって生じる「ジョイント・アクション」(joint action)のことを、ないしは、そのような「ジョイント・アクション」が複数集まり、それらが相互に接合されたもののことを指していた。ブルーマーは、その「ジョイント・アクション」について以下のように述べている。

「私〔ブルーマー〕は、『ジョイント・アクション』という用語を、ミードの『社会的行為』(social act)の代わりに用いる。この用語が示しているのは、個々人が各々の行動を互いに適合させることから成立する、行為の一層大きな集合的形態である。……事実、この〔ジョイント・アクションの〕实例の全体が、その無限の多様性と、可変的な結びつきと、複雑なネットワークとによって、一つの社会を形成するのである。……彼〔ミード〕にとって、社会的行為〔=ジョイント・アクション〕とは、社会の基礎的単位だったのである。したがって、それを分析すれば社会全体の特性が明らかになる」(Blumer, 1969, p. 70、邦訳90頁)

また、このような「ジョイント・アクション」を、一つの「構造」(structure)としてではなく、あくまで「過程」(process)として認識しなければならないこともブルーマーは強調している。

「ジョイント・アクション(joint act)とは、まず何よりも『組織化されゆく』行為("organizing" action)であって、『〔既に〕組織化された』行為("organized" action)ではない。あとから振り返ってみてはじめて『〔既に〕組織化された』ものとして見えるにすぎない。」(Blumer, 1975, pp. 59-60)

では、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、そのような行為の相互接合、ないしは、個々の行為の「組織化」は、如何にしてなされるものと認識されていたのか。換言すれば、「ジョイント・アクション」は如何にして形成されると考えられていたのか。そのことについて、以下に論じてゆくことにしよう。

まず前提として述べておかなければならないことは、ある行為者を取り巻くのは、先に三つの基本的な前提の議論において述べたように、その行為者にとっての「対象」(object)のみからなる「世界」(world)だけであった。換言すれば、ある行為者を取り巻くのは「対象」(「意味」を付与された「物事」)のみであったという点である。ということは、その行為者にとっての他者という存在も、その行為者にとっての「対象」の一種(「社会的対象」(social object))であるということになる。ということは、さらに、その行為者は、その他者に対して、「自己相互作用」の過程を通じて、ある一定の「意味」を付与し、

その「意味」に基づいて、その他者に対して行為しているということになる。しかしながら、ここで注意しなければならないことは、その他者にとってもその行為者という存在は、その他者にとっての「対象」の一種だということである。すなわち、他者の側も、その行為者に対して、「自己相互作用」の過程を通じて、ある一定の「意味」を付与し、その「意味」に基づいて、その行為者に対して行為しているということなのである。

そのような行為者と他者との関係にあって、行為者と他者のどちらもが、相手が自分を「対象」として扱っているということを考慮に入れ⁽⁹⁾、その考慮（正確には考慮した結果）に基づいて行為し合うとき、そこに「ジョイント・アクション」が形成されるとブルーマーは考えていた。すなわち、行為者と他者の双方が「考慮の考慮」(taking account of taking account)をおこない、それに基づいて互いに相手に対して行為し合うとき、そこに「ジョイント・アクション」が形成されるとブルーマーは考えていたのである(Blumer, 1969, pp. 108-111、邦訳140-144頁)。ブルーマーによれば、この「考慮の考慮」とは、他者が考慮に入れていることを、その行為者自身が考慮に入れることによって、また、その行為者が考慮に入れていることを、他者の側も考慮に入れることによって、その行為者と他者の双方が「単に自分が相手のことを考慮に入れているだけではなくして、逆に、自分のことを考慮に入れている相手として、その相手のことを考慮に入れる」ことを意味する(Blumer, 1969, p. 109、邦訳141-142頁)。その結果、相手が自分に関して想定していることを、自分自らが想定することになるのである。このことを、例証を交えながら以下に具体的に説明してゆくことにしよう。

ブルーマーによれば、このような「考慮の考慮」は、互いが相手に対して発する「身振り」(gesture)を媒介としておこなわれる。さらに、そこで発せられる身振りは、それを発する者と向けられる者との双方に対して、三つの意味をもつとブルーマーは説明している。これを指してブルーマーは、身振りの「意味の三価性」(triadic nature of meaning)と呼んでいる(Blumer, 1969, p. 9、邦訳11頁)。では、その三つの意味とは何を指しているのか。それを以下のブルーマーの言説の中に読みとって見ることにしよう。

「それ〔身振りの意味〕は、〔まず第一に〕その身振りが向けられた個人が何をすべきかを表す。〔第二に〕それはその身振りをおこなっている個人が何をしようと考えているかを表す。〔第三に〕それは、この両者の行為が接合されることによって生じるジョイント・アクション〔の形態〕を表す。というわけで、たとえばある強盗が、被害者に向かっ

て両手をあげろと指示するときには、〔それは〕(a)被害者がこれからおこなうべきことを表し、(b)強盗が〔これから〕おこなおうと考えていること、すなわち被害者から金を強奪することを表し、さらに(c)〔両者の間で〕形成されてゆくジョイント・アクション〔の形態〕、この場合には強盗を表している〔ことになる〕。」(Blumer, 1969, p. 9、邦訳 11 - 12 頁)

すなわち、身振りがもつ三つの意味とは、まず第一に、その身振りが向けられた個人が何をすべきかを、第二に、その身振りを発している個人が何をしようと考えているかを、さらに第三に、この両者の行為が接合されることによって生じる「ジョイント・アクション」の形態の三つを表していたのである。ブルマーによれば、これら三つの意味のいずれかでも、行為者または他者のどちらかが、または双方が把握し損ねれば、「ジョイント・アクション」の形成は妨げられてしまうという(Blumer, 1969, p. 9、邦訳 12 頁)。しかし「把握し損ね」ないこと、換言すれば、適切に把握することは如何にして可能なのだろうか。この問題を、「行為者」を上記の強盗の例でいう「被害者」とし、「他者」を「強盗」とした上で、その行為者と他者のうち、行為者サイド(=被害者サイド)に立って考察してみることにしよう。

先の強盗の例において問題となるのは、(a)と(b)である。すなわち、如何にして行為者(被害者)は、他者(強盗)が、その行為者に対して発する身振りがその行為者に要求する行為の様式((a))と、それに接続される他者の行為の様式、すなわち、その行為者がその他者の身振りが示唆する通りにその他者に対して一定の様式で行為した場合、その他者は如何なる様式で更なる行為をその行為者に対しておこなってくるのかを(b)、把握ないしは想定することができるのが問題なのである。これら((a)(b))をその行為者(被害者)が想定することが出来れば、その行為者は同時に、(a)身振りに伴う第一の行為(被害者が手を上げる)、(b)第二の行為(強盗がお金を奪い取る)、(c)第三の行為(被害者の行為と強盗の行為とがかみ合うことによって生じる「ジョイント・アクション」の形態、すなわち、「強盗」)の三つを数珠繋ぎ式にあらかじめ想定することが可能となる。また、その想定に基づいてその行為者(被害者)が行為すれば、「ジョイント・アクション」は無事形成されることになる(但し、他者すなわち強盗の適切な想定と、それに基づくその強盗の適切な行為が前提条件にはなっているが)。したがって、問題は(a)(b)が如何にしてその行為者(被害者)に把握可能かである。

この問題を解く上で参考となるのは、ブルーマーの以下の言説である。

「……それ〔ジョイント・アクション〕が新たな形態のものであれ、繰り返し確立されてきたものであれ、如何なるジョイント・アクションの実例も、必然的に、それに先行する参与者達の諸々の行為という背景から生じてきたものである……新たなジョイント・アクションの形成に参加する者達は、いつでも、その形成過程に、既に各々が所有している対象からなる世界や、意味のセットや、解釈図式の数々をもち込んでくる。このように、新たな形態のジョイント・アクションは、それに先行するジョイント・アクションという文脈から出現してくるのであり、またそのジョイント・アクションと密接に結びついているのである。」(Blumer, 1969, p. 20、邦訳25-26頁)

すなわち、「ジョイント・アクション」には、ある一定の時点における行為者と他者との「水平」(horizontal)のつながりのみならず、過去との「垂直」(vertical)なつながりも存在しているということなのである(Blumer, 1969, p. 20、邦訳26頁)。ここで、先の強盗の例をもう一度用いるならば、行為者すなわち被害者は、他者すなわち強盗の発する身振りが、その行為者(被害者)に要求する行為の様式と、その他者(強盗)がこれから何をおこなおうとしているのか(=強盗の行為様式)を、その行為者(被害者)が前もって所有している一連の解釈図式を以て解釈し想定しているわけである⁽⁴⁾。以上のようにして、ある身振りが有する三つの意味を、行為者と他者の双方が適切に把握しているとき(=ある身振りに対して、行為者と他者の双方が同じ意味を付与しているとき)、換言すれば「ある人が呈示しているある身振りが、呈示しているその人間によって、呈示されている者によって見られているように、見られている」とき(Blumer, 1993, p. 179)、両者の間に「共通の定義」(common definition)が成立していると言え(Blumer, 1969, p. 9, 11, 71、邦訳11、14、92頁)、その「共通の定義」に立脚して互いが行為し合うとき、そこにはスムーズな「ジョイント・アクション」形成がなされうるとブルーマーは考えている(Blumer, 1969, p. 71、邦訳92頁)。

ブルーマーによれば、このようなプロセスを経て形成される「ジョイント・アクション」(=小規模な「社会」)が、さらにまた別の「ジョイント・アクション」に接合されることによって、より大規模な「社会」(=より大規模な「ジョイント・アクション」)が形成されるという(Blumer, 1969, pp. 19-20, 70、邦訳24-25、90頁)。すなわち、それが

ミクロなレベルであれマクロなレベルであれ、「人間の社会」なるものは結局のところ、すべて「ジョイント・アクション」という「過程」として捉えられるとブルーマーは考えていたのである⁽⁵⁾。

以上、本節での議論を要約すれば次のようになる。ブルーマーのシンボリック相互作用論の「ルートイメージ」においては、「行為者と世界との関係」は、その行為者の「自己相互作用」により設定されるものとされていた。さらに、このような関係設定能力をもつ行為者が複数集まり、互いに「考慮の考慮」に基づいて行為し合い、自己の行為を他者の行為に接合することによって、「ジョイント・アクション」＝「社会」が形成されるものとされていた。このようなブルーマーの議論は、確かに船津も言うように、社会理論の根底に「自己相互作用」をおこなう「主体的存在」たる「人間」を据え、「社会」を、そのような「人間」によって形成されるものとして、「人間と社会との関係」を捉えようとするものである（船津、1976年、20、260頁）。しかし、以上のようなブルーマーの論じる「行為者と世界との関係」、ならびに、「人間と社会との関係」（＝「行為者と社会との関係」）に対して、それが「主観主義」的であるとする批判が投げかけられることとなった。次節では、その「主観主義」批判の内実を明らかにし、次章での我々の課題を設定することにしたい。

第二節 ルイスによる主観主義批判

ルイスは、その「シンボリック相互作用論の先駆者としての初期アメリカプラグマティスト」(Lewis, 1976)と題する論文の中で、「シンボリック相互作用論」、その中でもとりわけブルーマーのシンボリック相互作用論を、それが「主観主義的」(subjectivistic)な性格を有していると批判している。ルイスによれば「初期プラグマティスト達は、大別して二つの流派に分かれる。そのうちの一つは、パースとミードの社会的实在論(social realism)の立場であり、もう一つは、ジェームズとデューイの主観主義的名目論(subjective nominalism)の立場である。そして、シンボリック相互作用論の理論的・方法論的な立場は、基本的に後者の延長上に位置するものである」(Lewis, 1976[1992, p. 138])。またそのような「主観主義的」(subjectivistic)な性格を有する最たるものが、ブルーマーのシンボリック相互作用論であるとルイスは指摘している(Lewis, 1976[1992, p. 138])。

ルイスは、ブルーマーのシンボリック相互作用論が「主観主義的」であるということを立てるにあたって、まずその理論の思想的源泉をあとづけることから議論を始めている。

ルイスによれば、確かに、ミードは1900年代の初期に、ブルーマーが学んだシカゴ大学社会科学において多大な影響力をもっていたが、同時にそこでは、哲学・心理学・論理学においてデューイが支配的な影響力を及ぼしてもいた。その結果、学生達にはミードの思想をデューイのパースペクティブを通して解釈するという傾向が生じ、そのため、彼ら二人の微妙ではあるが重要な思想的差異が曖昧なものとなってしまったとルイスは言う(Lewis, 1976[1992, p. 146])。ミードの名著と目されている『精神・自我・社会』(Mead, 1934)は、当時の哲学科学生によって編集されたものであるが、これは本来、社会→自我→精神という順序で論じられなければならないものであるにもかかわらず、彼らは精神→自我→社会という順序で論じてしまった。ここにデューイの影響が色濃く現れているとルイスは言う(Lewis, 1976[1992, pp. 146-147])。精神や自我をもとに社会を説明するという説明方法は、デューイによって提起された個人主義的・主観主義的社会心理学を想起させるものであるとルイスは指摘し、この立場をシンボリック相互作用論は受け継いでいるとみなしている。「シンボリック相互作用論者達は、もともと不十分だったこの哲学科学生〔のミード理解〕をそのまま残すことになってしまった」(Lewis, 1976[1992, p. 147])とルイスは述べている。さらに、その最たる存在がブルーマーのシンボリック相互作用論であるという。ルイスの批判するところでは、ブルーマーの「ルートイメージ」、ないしは、理論的

パースペクティブにおいては、人間個人による社会的・物質的環境の定義と解釈を強調しすぎるものとなっているという(Lewis, 1976[1992, p. 148])。すなわち、シンボリック相互作用論では、個人とその社会的・物質的環境との「関係」(relation)を決定するのは、その個人の解釈や定義であるとされている(Lewis, 1976[1992, p. 148])。また、このような批判は、日本においても、村井がよりダイレクトにおこなっている。村井は、ブルーマーが唱える「ミード理論」に対して、以下のように批判をおこなっている。

「〔ブルーマーによる〕ミード理論の『主観主義』は、……『自己存在の実体』としての対象(客観的実在)の存在を軽視もしくは抹消し、対象はそれが行為者にとってもつ意味に従って行為者によって構築されるとして、対象をあくまでも主観による構成物とする主張として現れる。……このようないわゆる『主観的観念論』は、必然的にあらゆる実体概念の軽視ないしは否定につながり、さらには社会の構造的現実の軽視という結果をもたらすことになる。」(村井、1974年、58頁)

またルイスは、そのようなブルーマーの理論的パースペクティブの柱石となっている「自己相互作用」概念に対しても、次のように批判している。

「他からの拘束を受けない自由意志に基づく(free willed)、独自の特性をもつ個人が、自らの自由な意志に基づいて(voluntarily)、種々の事柄を自らの思うがままに『定義』(define)する。そしてその定義を構成する諸要素は、その個人が所属する社会の社会構造から拘束を受けないものとされている。」(Lewis, 1976[1992, p. 148])

この批判でルイスがとりわけ強調することは、ブルーマーの理論的パースペクティブにおいては、個人は「社会化」(socialization)されることがない(社会によって形成されることがない)存在としてみなされているということであった(Lewis, 1976[1992, p. 148])。

ルイスによる「主観主義」批判の要点となっているのは、シンボリック相互作用論においては、とりわけブルーマーのそれにおいては、人間が社会を形成するという側面を殊更に強調するが、人間が社会に形成されるという側面を殆ど無視しており、社会に形成されない人間を想定しているとするものであった。ルイスのいうところの「ジャングルに棲む社会化されざる狡賢い人間」(an unsocialized calculating man of jungle)がそのような

批判内容を端的に表現している(Lewis, 1976[1992, p. 148])。事実このことが、ルイスによるシンボリック相互作用論に対する判決でもあった。ルイスは以下のように述べている。

「シンボリック相互作用論は、社会の中でその役割を遂行することはあっても、決して社会の産物(product)にはならない、というジェームズやデューイの自律的個人像(autonomous individual)を支持しつづけてきたのである。」(Lewis, 1976[1992, p. 149])

さらにこのような人間が、自らの環境を自分の思うがままに解釈し定義し、その結果として、自分とその環境との「関係」を思うがままに設定できるものとしてブルーマーは考えていると、ルイスは批判しているのである。また、基本的にシンボリック相互作用論の立場に立つ船津にいたっても、ブルーマーのパースペクティブにおいては、行為者による「『解釈』がどのようになされるのか、また『解釈』の妥当性が如何にして知られるのかについては何も触れられていない。『解釈』は人々の恣意性に委ねられ、その内的論理が究明されないことになってしまうおそれが存在している」と論難している(船津、1989年、224頁)。

以上のようなルイスによる「主観主義」批判と船津の指摘の内容をまとめると、それは次のようになる。

すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、人間は「社会化」(socialization)されない存在としてみなされており、かつそのような人間は、恣意的に自らの環境を解釈・定義し、その結果として恣意的にその環境との関係を設定するかのごとく考えられている。またそのような人間が、自らの解釈の妥当性を如何なる形で知ることが出来るのかが、ブルーマーのパースペクティブにおいては明らかにされていない。

しかし、このようなルイスによるブルーマー批判は、ブルーマーの「シンボリック相互作用論」の総体からすれば、まったく的外れなものであり、それは虚構に等しいものであると我々は考えている。次章ではそのことを明らかにすることにしたい。

第三章 主観主義を越えて

第一節 ルイスに対するブルーマーの反論

ブルーマーは、前章で述べたルイスの「自己相互作用」概念に関する批判に対して、以下のように反論を試みている。

「これ〔ルイスの批判〕は、私が行為者としての人間(human actor)に関して提示した見解に関する、非常に馬鹿げたカリカチュアである。〔というのも〕この批判は次の点を見解しているからである。1) 行為者は、自らの展開途中にある行為(developping action)を、他者達の進行中の(ongoing)諸々の行為に適合(fit)させなければならないし、その結果として、必然的にそれら他者達の行為によって抑制されることになる。さらに2) 行為者は、自らの状況を定義するに際して、その行為者が、その他者達の集団から前もって獲得した、定義の諸図式(schemes of definition)によってその定義を方向付けられている。そして3) 自らの行為を形成するに際して、行為者は、その立場から自分自身に話しかける一般化された諸々の役割(generalized roles)によって〔も〕方向付けられている。これら〔1)2)3)〕が、私がさまざまな議論の中で、行為者としての人間による自身の行動の形成に関して、詳しく述べたことのすべてである」(Blumer, 1977[1992, p. 154])。

以上のブルーマーによる反論において示された論点を、補足しつつ整理すれば、以下のようになる。

【引用文中の1)について】

a) 行為者は、自らの世界（正確にはその一構成要素である他者達やその他者達の行為）に対して、自身の行為を適合(fit)させようとしなければならない。つまり、行為者は、その世界に対して、適合的な様式で行為をおこない、その世界との間に適合的な関係を取り結ばなければならない。ということは、行為者の行為とは、その世界に対して自らの活動を適合させること、ないしは、その世界との間に適合的な関係を取り結ぶことであると言える（世界に対する適応活動としての行為）。事実ブルーマーは、1969年の『シンボリ

ック相互作用論』において、行為者が、他者の行為によって形成されつつある状況に、自身の解釈枠組が適合しているかどうかを、さらには、そのような解釈枠組に沿ってなされている自身の活動も適合しているかどうかを、絶えず判断しなければならない存在であることを論じている(Blumer, 1969, p. 66、邦訳85頁)。

b) その際、行為者は、その世界の一構成要素である他者達の行為によって抑制されることになる。というのも、行為者の行為がその世界に対する適応活動である限り、それは、その行為者による勝手気ままな活動であってはならないからである。この点に関しては、ブルーマーは1969年の著作で、行為者は、他者に対する適応活動をおこなうに際しては、自らの感情を調整ないしは抑制しなければならないことになる、ということを知っている(Blumer, 1969, p. 66、邦訳85頁)。さらに「もし誰もが自分勝手に自らの性向や態度を表出していたならば、人間の社会生活は無政府状態に陥ってしまう。そこには社会学者が研究すべき如何なる人間の集団生活も存在しなくなってしまう」(Blumer, 1969, p. 97、邦訳126頁)とも述べている。

【引用文中の2)について】

c) また行為者は、その世界に対して自身の活動を「適合」させようとするに先立って、その状況を定義しなければならないが、その定義は「定義の諸図式」によって方向付けられている。

d) それらの「定義の諸図式」は、その行為者がその世界から前もって獲得しているものである。この点に関しては、先に議論したシンボリック相互作用論の三つの基本的な前提のうちの第二の前提を思い出して貰いたい。そこでは、他者ないしは他者達によって、その行為者にとっての「物事」の「定義」がなされていた。他者が「物事」の「定義」をその行為者に与えるということは、すなわち、その「物事」を解釈する上での「定義の諸図式」をその行為者に与えるということと同義である、と考えても差し支えないであろう。

【引用文中の3)について】

e) さらに、行為者による、そのような「定義の諸図式」を活用した定義、ならびにその結果としての行為形成の際には、その行為者は、その立場から自分自身に話しかける「一般化された諸々の役割」によっても方向付けられている。なぜなら、先の(本稿第二章第一節)「解釈過程」(「自己相互作用」過程)の議論でも明らかにしたように、行為者は、

前もって世界から獲得した「定義の諸図式」をそのまま使用するわけではない。その「定義の諸図式」は、その行為者によってその使用を吟味されるわけであるのだが、その吟味すなわち「解釈」（「自己相互作用」）という内的相互作用ないしは内的行為をおこなう際に、その行為者を方向付けているのが、この「一般化された諸々の役割」なのである。

(Blumer, 1969, pp. 12-15、邦訳 15 - 19 頁, 1993, pp. 184-185)。「自己相互作用」とは、先にも議論したように「自分自身と相互作用」する過程を指していた。そこでは、行為者は、その「定義の諸図式」をめぐって、さまざまな相互作用を自分自身とおこなわなくてはならない。その場合、他者に対するその行為者の（外的）行為が「定義の諸図式」によって方向付けられているように、その行為者の自分自身に対する（内的）行為も、何らかの「図式」によって方向付けられているはずである。その内的行為において、その行為者を方向付ける「図式」が、この「一般化された諸々の役割」なのである。この「図式」も、その行為者が前もって世界（他者ないしは他者達）から獲得したものであるということもはや言うまでもない(Blumer, 1969, p. 12、邦訳 16 頁)（本稿第二章第一節）。

以上のa)からe)において我々が注目したいのは、c)とe)である。つまり、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、行為者は、内的にであれ外的にであれ、とにかく行為する際にはこれらの二つの「図式」（「定義の諸図式」、「一般化された諸々の役割」）によって方向付けられている存在としてみなされているわけである。すなわち、行為者は、行為ないしは適応活動をおこなうにあたって、いつでもこれら二つの「図式」を前もって獲得し、これら二つの「図式」によって自らの活動を方向付けられなければならない、または方向付けられている存在として、ブルーマーの「ルートイメージ」においては認識されているわけである。したがって、先に提示した我々の課題のうち、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、人間は「社会化」(socialization)されない存在としてみなされているという批判に関しては、それがブルーマー批判である限り妥当なものではないということが分かる。

しかしこれだけでは、そのような人間は、恣意的に自らの環境を解釈・定義し、その結果として恣意的にその環境との関係を設定するかのごとく考えられており、またそのような人間が、自らの解釈の妥当性を如何なる形で知ることが出来るのかが明らかにされていないとする批判に対しては、そのブルーマー批判としての非妥当性を十分に指摘することが出来ない。そこで我々は、従来の日本におけるブルーマーのシンボリック相互作用論研

究においては、一度も触れられたことがなかったと思われる⁽¹⁾、「トークバック」(talk back)概念を取り上げる。「パーソンズのパラダイムに対抗する者という、ブルーマーの役柄が彼を一段と主観的意味に傾倒させた」(宝月、1984年、88頁)と評されているブルーマーのシンボリック相互作用論ではあるが、結論を先取りすれば、この「トークバック」概念がブルーマーの理論的立場(「ルートイメージ」)に導入されることによって、人間は、恣意的に自らの環境を解釈・定義し、その結果として恣意的にその環境との関係を設定するかのごとく考えられており、またそのような人間が、自らの解釈の妥当性を如何なる形で知ることが出来るのかが明らかにされていないとするブルーマー批判の非妥当性を十分に指摘することが可能となるのである。

第二節 「トークバック」論の導入

マックフェイル等(MacPhail, C., Rexroat C.)によれば、ブルーマーが、「理論」すなわち「ルートイメージ」の文脈において想定している「行為者と世界との関係」と、「方法論」(自然的探求〔法〕(naturalistic inquiry))の文脈において想定している「研究者と経験的世界との関係」との間には、パラドックスが生じているという。彼等によれば、ブルーマーは、一方で、「方法論」の文脈においては、研究者が直面している世界、すなわち「経験的世界」(empirical world)は、研究者のその世界に対する意味付けや認識に対して、「抵抗」(resist)ないしは「トークバック」(talk back)することが出来ると述べ、他方で、「理論」の文脈においては、行為者が直面している世界、すなわち「対象」(object)のみからなる「世界」(world)は、その行為者によるその世界に対する意味付け次第で、(その世界のその行為者にとっての)特性ないしは性格が決定されてしまうものとして捉えられているという(McPhail and Rexroat, 1979, p. 457, 459)。確かに、前節までに議論した限りでは、「理論」の文脈においてブルーマーが想定した「行為者と世界との関係」なるものは、行為者によるその世界に対する意味付け次第で決定されるものとして扱われていた。しかし、無論、前節で明らかにしたように、その意味付けは、その行為者が、前もって自らの世界から獲得した、諸々の「図式」にしたがってなされているという限定がついている。

ところで、その「方法論」すなわち「自然的探求」論においてブルーマーが想定しているとすする「研究者と経験的世界との関係」とは如何なるものであったか。ブルーマーは、1969年の著作である『シンボリック相互作用論』の第1章(第2部・第3部)の中で描いた「研究者と経験的世界との関係」⁽²⁾を、それ以降に書かれた論文において、さらに洗練させ(Athens, 1993, p. 159)、以下のように簡潔に要約している。

「経験的世界とは、必然的に外的領域に存在する世界(world out there)、すなわち、研究者の外側に存在する世界である。このような世界が有する頑固な特性ないしは性格(obdurate character)ということの意味することは、この世界が、研究者が有するその世界に関する諸々の前提や諸々の専断に対して、抵抗(resist)することができる、ということである。この意味で、経験的世界は、科学者がそれに関して抱いている諸々の主張に対して、トークバック(talk back)することが出来ると言える。したがって研究者は、自らが誤った

前提や重大な思い違いに立脚して研究を進めていないことを確証 (insure) するために、自らの前提や専断を、絶えずこの経験的世界に照らして点検 (check) しなければならない。」
(Blumer, 1993, p. 164)

確かに、ブルーマーによるこの説明を見る限り、「研究者と経験的世界との関係」は、研究者による一方的な意味付けで決定されるものとしてはみなされてはいない。この説明によれば、確かに「経験的世界」は、一方で研究者による定義ないしは解釈が適用されるものの、他方で、そのような定義ないしは解釈に対して「抵抗」ないしは「トークバック」することが出来るものとしてみなされている。しかも、研究者はそのような「抵抗」ないしは「トークバック」を手がかりにして、自らの定義ないしは解釈の妥当性の如何を知ることが出来るとしている。ブルーマーが描いたこのような「方法論」における知見を、ブルーマー自身が、「理論」すなわち「ルートイメージ」の文脈に導入しようとしたのが、以下に述べる存在論に関する四つのテーゼなのである。

先のマックフェイル等の批判と、本稿第二章第二節で紹介したルイスの批判の「二つの批判にこたえる形で」(Baugh, 1990, p. 58)、ブルーマーは、自らの存在論的前提を以下の四つのテーゼにまとめている (Blumer, 1980, p. 410)。

- 1) 人間にとって現実の世界 (world of reality) は、外的領域に存在し (out there)、それは人間に対峙し (stand over against)、人間のその世界に対する行為に対して抵抗 (resist) する可能性をもっている。
- 2) この現実の世界は、人間によって、それが知覚 (perceive) されるという形式においてのみ知られるようになる。
- 3) したがって、人間がその現実に対する知覚を発展させるにしたがって、その〔その人が把握する〕現実も変化することになる。
- 4) その世界からのその知覚に対する抵抗は、その知覚の妥当性の試金石 (test) となる。

まずこの四つのテーゼで問題となるのは、第三のテーゼである。ここは本来、我々による訳の補足を除くならば「したがって、人間がその現実に対する知覚を発展させるにしたがって、その現実も変化することになる」というテーゼであった。このようなブルーマーのテーゼを、バーグは「複数の存在論的な主張の矛盾した並置」(an inconsistent juxtaposition)

position of ontological claims)であると批判している(Baugh, 1990, p. 59)。すなわち、「知覚を変化させるに伴って変化する現実とは、人間によって経験された世界 [=その人が把握する現実] であって、その世界それ自体ではない」とバークは言っているのである(Baugh, 1990, p. 60)。つまり、ブルーマーの第三のテーゼには、現実そのものと人間によって把握されたところの現実の二つが、明確に区別されずに混在する形で述べられているとバークは批判しているのである。我々も、これはブルーマーによる説明不足ではないかと推測している。すなわち、ブルーマー本来の意図としては、この第三のテーゼにおける「現実」とは、その人間が把握する「現実」を意味していたのではないかと我々は考えている。その証拠となるのが、ブルーマーがイーヴィン・ドイッチャー(Deutscher, Irwin)に対して1979年4月17日に宛てた次の手紙の内容である(Morrione, 1988, p. 8掲載)。

「ミードは、その哲学的な立場においてプラグマティストであったし、私もそうである。私は、自分が实在論か観念論かという二分法のいずれかに押し込まれるとき、大変不快な気分になる。プラグマティズムは、实在論や観念論とは異なる第三のパースペクティブとして展開してきたものであった。伝統的な区別立ては単純なものである。实在論が断言するには、世界というものは、永遠に固定化された諸々の対象から構成されており、それはただ単に発見されるのを待つばかりである。そして、観念論が断言するには、そうではなくして、世界というものは、観念という形式においてのみ存在し、それは意識の流れの中に位置づけられるものである。一方、プラグマティズムが断言するには、現実の世界(real world)は、『外的領域』(out there)に存在するが、それは、人間がそれを描写するそのやり方(way)を通してのみ、その人間によって知られるようになる。ここで人間とは、この世界との経験を通じて、その描写(depiction)を変化させることが出来る能力をもった存在を指す。」

この手紙において、「変化」とされているのは、その(現実の)世界そのものではなくして、その世界に関するその人間の「描写」(depiction)であるとされているところに注目されたい。このような証拠があるが故に、我々は、先のブルーマーの第三のテーゼに「その人が把握する」という言葉をあえて挿入したのである。

では、先に提示した四つのテーゼがブルーマーのシンボリック相互作用論の「ルートイメージ」に対して有する意義は何か。それはつまり、「方法論」の文脈においてのみ論じ

られていた、世界から人間への「トークバック」ないしは「抵抗」という概念が、「ルートイメージ」、すなわち「理論」の文脈にも導入されたということである。この段階で、行為者にとっての世界（すなわち「世界」(world)）とは、行為者による一方的な定義ないしは意味付与を許すものではなく、そのような活動に対して働き返すことができる存在として捉えられることとなる。換言すれば、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、行為者にとっての世界とは、一方で、行為者によって解釈・定義される存在として、他方で、そのような解釈や定義に対して「抵抗」する存在として捉えられるという「二重の性格」(dual character)をもつものとして認識されることとなったのである(Morrione, 1988, p. 7)。また、この「トークバック」という知見が「理論」の文脈に挿入されることによって、本章において懸案となっている、行為者は自らの解釈の妥当性を如何なる形で知ることができるのかという問いに答えることができる。つまり、世界が人間（行為者）に対して発する「抵抗」ないし「トークバック」を手がかりとして、その人間は自らの解釈や定義の妥当性の如何を知ることができる、とすることが可能になるのである。では、この「抵抗」ないし「トークバック」とは、具体的には何を意味しているのか。これを明らかにするに先立ち、以下ではひとまず、この四つのテーゼに対するブルーマーの説明を追ってゆくことにしよう。

ブルーマーによれば、この四つのテーゼが意味することは、一方で、観念論(idealism)の立場とは違って、人間によって全く知覚されないかもしれないし、知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない「現実の世界」が存在する、と認めているということであり、他方で、实在論(realism)の立場とは違って、この世界が人間にとって如何なる特性をもつのかは、その世界に本来的に備わっている(intrinsic)のではなく、それは、人間がそれを如何に知覚するか次第である、ということを知覚しているということの二つである(Blumer, 1980, p. 410)。したがって、ブルーマーにおいては、「現実の世界」というものは、一方で人々の外側に存在するもの(lodged outside of people)としてみなされ、他方でそれが人間にとってもつ特性(character, quality)は、それがその人々によって如何に知覚されるかに依るものとみなされているということになる(Blumer, 1977[1992, pp. 154-155])。

ここで、「現実の世界」を「知覚」ということは、後に述べるように、その「現実の世界」を、ある一定の「パースペクティブ」(perspective)を通して見るということの意味する。そのことを踏まえた上で、以下のブルーマーの言説に目を向ければ、上述の、ブ

ルーマーによる観念論と実在論の乗り越えの内容が、より一層明白なものとなる。

「パースペクティブなしには、『外的領域にある』(out there)その世界は、如何なる特定の表現形式ももちえない。折に触れてミードが言っていたように、あらゆるパースペクティブから解き放たれた外的領域にある世界は、単なる『如何なる特性も決められていない素材』(neutral stuff)なのである。パースペクティブが、その世界にその表現形式や特性を与えるのである。」(Blumer, 1977[1992, p. 155])

このような定式において、人々によって知覚された「現実の世界」のある一定の部分が、ブルーマーの「ルートイメージ」において馴染みの「対象」(object)に相当する(Blumer, 1977[1992, p. 154])。したがって、如何に知覚されるかという言説は、如何なる種類の対象が形成されるかと同義であるということが言える。さらに、この知覚のされ方は、その人間がどのようにその世界に対して働きかけようとしているのかを、換言すれば、その人間のその世界に対する行為の様式を表しているとブルーマーは述べている(Blumer, 1977[1992, p. 155])。このことを、ブルーマーは例証を交えながら以下のように説明している。

「ミードがよく言っていたように、水平線上に見られている山の連なりは、〔それを見る観察者にとっては〕水平線上に存在するのであって、観察者の頭上に存在するのではない。さらに、この山の連なりは、それを見る人々が異なれば、その山が呈する現実も異なりうる。ある人々にとっては、それはその山の向こう側にある地域への接近を妨げる岩の障壁になりうるし、またある人々によっては、太古の地球で起きた大規模な地殻のねじれのために生じた地層として見られる可能性がある。またある人々によっては、貴重な鉱物の源泉として、さらには、一群のエルブ〔鹿の一種〕のすみかとして見られる可能性がある。巨大な岩の障壁として見られようと、地層として見られようと、鉱物の貯蔵庫としてみられようと、またエルブのすみかとして見られようと、その山の連なりは依然として『世界として外的領域にあるもの』(out there in the world)なのである。しかしその物事〔山の連なり〕が、それを知覚する人間にとってもつ特性は、それが彼らによって如何に知覚されるか次第であり、別様にいえば、彼らがそれに対してどのように働きかけようとしているか次第なのである。」(Blumer, 1977[1992, pp. 154-155])

さらに、人々による働きかけのされ方如何によって、つまり、人々の行為の様式の如何によって、その人々とその世界との間に設定される「関係性」の如何が決まるということ はもはや言うまでもない。

ブルーマーによれば、人間のこのような知覚活動は、ある一定の「パースペクティブ」(perspective)にしたがってなされている(Blumer, 1977[1992, p. 155])。ブルーマーの「ルートイメージ」においては、この「パースペクティブ」という概念は、ある一定の「もの の見方」、ないしは、先に登場した(本稿本章第一節)「定義の諸図式」と同義で用いら れているものと考えて差し支えない⁽³⁾。

このパースペクティブという概念に関して、ブルーマーは三点指摘している。

まず第一に、ある「物事」(thing) (つまり、「現実の世界」のある一定の部分) を知覚 するということは(つまり、「対象」にするという事は)、その「物事」をある一定の パースペクティブを通して見るということを意味する。またこのパースペクティブが、 「社会的相互作用」と「自己相互作用」の双方の過程で形成・再形成されるものであると いう見解(つまり、ブルーマーのシンボリック相互作用論の三つの基本的な前提の含意) は、ここにおいても堅持されている(Blumer, 1977[1992, p. 155])。ブルーマーによれば「ミ ードはパースペクティブというものを、それが社会的に形成されるもの(socially formed) として見ていた。すなわち、そこにおいて、参与者達が互いに対して種々の物事を定義す る社会的相互作用の過程を通じて発展するものとして見ていたのである」(Blumer, 1977[1 992, p. 155])。

第二に、このパースペクティブは、それがまさに「『外的領域にある』もの」(some- thing "out there")に向けられているが故に、「客観的」(objective)な性質をもっている という(Blumer, 1977[1992, p. 155])。この「客観的」というタームは、ブルーマーによれば 「パースペクティブが言及している物事が、理論的にいって公の吟味(public examina- tion)が可能であるという意味において」用いられている(Blumer, 1977[1992, p. 155])。ブ ルーマーによれば「ミードが『客観性』(objectivity)というものを、〔人々によって〕指 摘されている物事への、分有された接近可能性(shared accessibility)に求めていたこと は明らかである」(Blumer, 1977[1992, p. 155])⁽³⁾。

第三に、「これが〔この『客観性』の定義が〕ミードに、それによってパースペクティ ブの妥当性を確定することが出来る手段を提供した」(Blumer, 1977[1992, p. 155])とブルー

マーは述べている。この言説が意味することは、誰しもその指摘されている「物事」を吟味し、その「物事」が、実際にあるパースペクティブをもつ者、ないしは、者達によって主張されているような性格ないしは特性を、本当にもっているのかを確かめることが出来るということなのである。たとえば、一行為者としての科学者達がおこなっていることは、まさにこのことであるとブルーマーは述べている。ブルーマーは以下のように説明している。

「科学者集団 (scientific community) は、外的領域に存在する世界〔の存在〕を認め、その世界のある一定の部分をもつ特性に関して、種々の間を発し（これが各々の科学の領域にとっての問題 (problem) を構成するようになる）、それらの部分を吟味し、その結果として、その間にこたえようとしている。現実〔の世界〕への科学的アプローチということでミードが認識していたことは、〔まさに〕このことである」 (Blumer, 1977[1992, p. 155])。

ここまで議論を重ねた上で、ようやく「抵抗」ないしは「トークバック」が、何を意味するのかをより精確に明らかにすることができる。今までの議論を要約すれば、人間は「現実の世界」をある一定のパースペクティブにしたがって知覚する。そこで知覚されたその「現実の世界」のある一定の部分が、その人間にとっての「対象」 (object) となる。つまり、パースペクティブを「現実の世界」に適用することによって、人間はその世界（のある一定の部分）を自らにとっての「対象」とするわけであるのだが（その結果として、その世界に対するその行為者の行為様式が設定され、さらにその行為様式の設定によって、その人間とその世界との間に、ある一定の「関係性」 (relationship) が設定されるわけであるのだが (Blumer, 1993, p. 179))、当の「現実の世界」は、そのような人間による一方的なパースペクティブの適用を許すわけではない。「現実の世界」は、そのような人間のパースペクティブに対して「抵抗」ないしは「トークバック」することができるのである。このことはつまり、「現実の世界」とは、人間がその世界に適用するパースペクティブの如何に関わりなく独自の論理に基づいて存在しているものであるということの意味しているのである⁽⁴⁾。

さて、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、この「抵抗」ないしは「トークバック」とは、我々の理解では、人間のある一定の認識に対する「例外的実例」 (exceptional fact) の発生を意味している。ブルーマーはミードの知見を援用し（おそらくは『19

世紀の思想動向』(Mead, 1936))、次のように述べている。

「ミードにとって、『普遍的なるもの』(universal)とは、共通の意味(common meaning)、つまり、人々が何かを指摘する際に、その人々によって分有されているものを意味する。したがって、如何なる対象であっても、それが共通の意味をもつ場合……その共通の意味は『普遍的なるもの』を構成する。……山の連なりの例をもって来るなら、四つの指摘の各々(岩の障壁、地層、鉱物の宝庫、エルブのすみか)が『普遍的なるもの』なのである。このような簡単な例証に照らした場合……『普遍的なるもの』は、如何なる意味においても科学者集団のパースペクティブをその他の集団のパースペクティブから区別しはしない。したがって、その山の連なりはエルブのすみかであるという主張は、それが地層であるという主張と同様に『普遍的なるもの』なのである。……ミードの見解において、『例外的実例』は、既存の『普遍的なるもの』の外側に位置するものであり、それはその『普遍的なるもの』に挑み、その〔既存の〕『普遍的なるもの』を作り替える手段を提供するものであった。『例外的実例』がもつこのような役割を理解することなしに、ミードが如何なる意味において普遍的なるものと現実との関係を取り扱っていたかに関して有意義な説明をすることは出来ない。」(Blumer, 1977[1992, p. 156])

この「例外的実例」というタームは、ブルマーの「ルートイメージ」においては、既存の「概念」(concept)に対する「否定的実例」(negative case)と同義で用いられ、それは、人間のその既存の「概念」を洗練・改良するために、その人間によって利用される手段として考えられていた、とマリオオーネは解説している(Morrione, 1988, p. 4)。事実「例外的実例」に関するこのような説明は、この「概念」なるタームを、「〔人々に分有された〕パースペクティブ」や「普遍的なるもの」や「共通の意味」というタームと同義であると考えば(Blumer, 1969, ch. 9、邦訳第9章参照)、上記の引用においても示されていることであると言える。また、「〔人々に分有された〕パースペクティブ」と「普遍的なるもの」と「共通の意味」という三つのタームが、すべて同義のものであることは、上記の引用に示されていると言っても過言ではないであろう。さらに、このような「例外的実例」の内実をブルマーはその後の論考において、ある行為者に対する「新たな物事」(new thing)の出現と、既存の「物事」(thing)に対する「新たな解釈を適用する〔別の〕行為者」(individual applying new interpretation)の出現の二種類に大別している(Blumer, 1993,

p.171)。またここでの「物事」には、物質的な物事（→物質的对象）、抽象的な物事（→抽象的对象）、社会的な物事（→社会的对象）の三つが含まれることは、もはや言うまでもない（本稿第二章第一節における、三種類の「対象」--「物質的对象」「社会的对象」「抽象的对象」--についての議論を参照のこと）。

以上の本節での議論で明らかになったことは、行為者は、世界からの「例外的実例」の発生を契機として、自らの解釈ならびに定義、ないしは、自らが付与した「意味」の妥当性の如何を知り、その結果として、自らが付与したその「意味」を形成し直すということである。またそのことによって、行為者の行為様式とその行為者とその世界との間の「関係性」が再構成されるわけである。つまり、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、「行為者と世界との関係」は、行為者による世界に対する一方的な定義活動によって定められるのではなく、行為者による世界に対する定義と、その定義に対する世界からの「トークバック」を通しての（正確に言えば、その「トークバック」の行為者による知覚と解釈を通じての）、世界と行為者との相互影響ないしは相互作用の中で形成・再形成されるものとしてみなされていたということが言えるのである⁽⁶⁾。

本節における以上の議論で、我々が前章で設定した課題である、人間は、恣意的に自らの環境を解釈・定義し、その結果として恣意的にその環境との関係を設定するかのごとく考えられており、またそのような人間が、自らの解釈の妥当性を如何なる形で知ることが出来るのかが明らかにされていないとするブルーマー批判の虚構性を十分に指摘することができる。すなわち、人間は、自らの環境を解釈ないしは定義することによって、その環境を「世界」(world)とし、その環境との間に、ある一定の「関係性」を設定する存在としてみなされてはいるものの、そのような「関係性」は、その環境からの「抵抗」ないしは「トークバック」（＝「例外的実例」の発生）を契機として再構成される可能性を常に秘めているものとして、ブルーマーの「ルートイメージ」においてはみなされていたのである。では何故に常になのであろうか。何故なら、人間が対峙している環境、すなわち「現実の世界」には、その人間がその世界を如何に正確に認識しようとしても、いつでも「全く知覚されないかもしれないし」、「知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない」(Blumer, 1980, p. 410)という特性があったからである。同時に、ブルーマー理論においては、人間は、まさにその「抵抗」ないしは「トークバック」を手がかりにして、自らの解釈ないしは定義の妥当性の如何を知ることが出来るものと考えられていたのであ

る。

次章では、この「トークバック」という知見をブルーマーの「ジョイント・アクション」の議論に挿入することによって、ブルーマーのシンボリック相互作用論における「行為者と社会との関係」を再考することにしたい。

第四章 「動的・過程的」なものとしての「社会」

前章までに論じてきた論点をまず整理することから、本章をはじめることにして。まず大前提として、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「ルートイメージ」においては、行為者による世界との「関係性」の設定は、その行為者自身の「自己相互作用」のメカニズムを通じてなされるものとして捉えられていた。しかしそのような「自己相互作用」は、フリーハンドになされるものではなく、その行為者が、当該の「世界」(world) (正確には他者ないしは他者達) から前もって獲得した「定義の諸図式」と「一般化された諸々の役割」という、二つの「図式」に沿ってなされているものとして捉えられていた。そして、この二つの「図式」に沿って、行為者は世界との間に「関係性」を設定するわけであるのだが、そのような「関係性」は、その世界から行為者への「抵抗」ないしは「トークバック」を契機として(正確にはそのような「トークバック」の行為者による知覚と解釈を契機として)、常に再構成される可能性を秘めたものとして認識されていた。また、まさにその「抵抗」ないしは「トークバック」を手がかりにして、その行為者は自らの解釈ないしは定義の妥当性の如何を知ることが出来ると考えられていた。その意味で、ブルーマーのシンボリック相互作用論における「行為者と世界との関係」は、行為者による解釈や定義と、世界からの「トークバック」との相互影響ないしは相互作用の中で構成・再構成されるものとみなされていたことになる。この知見を、ブルーマーの「ジョイント・アクション」の議論に挿入することによって、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、「社会」が「動的・過程的」である所以を説明しようとするのが本章の目的である。

船津の特徴づけにもあるように、シンボリック相互作用論が有する特徴の最たるものは、「それが、人間のもつ自発性、創造性、積極性、主体性を強調する理論」であるということであった(船津、1976年、11頁)。さらに、「そこから、社会を、このような人間によってつくられるダイナミックなものであると観念する」ことも、この理論の最たる特徴であった。また、繰り返しにはなるが、ここで「主体性」とは、外部や内部からの刺激に対する単なる反応として、自らの行為を放出するのではなく「そのような『刺激』に対して『意味付与』を行い、・・・与えられた刺激を選択し、再構成し、修正することが出来る」(船津、1976年、12頁)という人間の特性を表す用語として船津は用いていた。またそのような「再構成」や「修正」を絶えずおこなう存在としての人間が「社

会」を形成しているからこそ、その社会は「ダイナミックで、生成発展的で、変動を内包する」ものとして、シンボリック相互作用論では認識出来ることになるのであった（船津、1976年、19頁）。またこのような「人間観」と「社会観」とは、船津においては、パーソンズを中心とする構造機能主義社会学に対するアンチテーゼとして提起されているものであった。船津は構造機能主義社会学に関して、以下のように述べている。

「現代の社会科学〔明らかに構造機能主義を指している〕においては、……過社会化の人間の観念〔＝社会化過剰の人間観〕がはびこり、刺激にただ反応するだけの『自動人形』や、他人のいうままになるロボットのごとき人間が問題とされている。したがって、そこでは、動的過程ではなく、安定均衡から成る静的社会のイメージが支配し、『社会化』と『社会統制』が中心的タームとなり、……シンボリック相互作用論は、現代の社会科学が、受身的、ロボット的人間の観念と固定的、静態的社会のイメージをもつことを激しく批判する。」（船津、1976年、21-22頁）

すなわち船津においては、「自動人形」ないしは「受身的人間」に対する「主体的人間」を、そして「安定的均衡から成る静的社会のイメージ」に対する「動的過程」としての社会観を標榜するのが、（ブルーマーのシンボリック相互作用論を含む）シンボリック相互作用論（の「ルートイメージ」）であるとされていたのである。果たして、ブルーマーの「ルートイメージ」は実際にそうだったであろうか。

我々の考察では、行為者は、自らの世界に対して、正確には他者（達）やその他者（達）の行為に対して、自身の活動を「適合」させようとする存在であることが、換言すれば、世界に対する適応活動をおこなおうとする存在であることが、ブルーマーのルイスに対する反論の中で提示されていた（本稿第三章第一節）。まさに自身の活動を適合させようとするがために、「自己相互作用」ないしはその特殊形態としての「考慮の考慮」をおこなうのであった。そしてそのような「考慮の考慮」に基づいて構成されるのが「ジョイント・アクション」(joint action)であった。すなわち、「ジョイント・アクション」とは、それに参与する行為者と他者の双方が「考慮の考慮」をおこない、その「考慮の考慮」に基づいて双方が相手に対して適応活動をおこなう中で形成されてゆくという、「相互適応」（船津、1993年、58頁）ないしは「お互いの行為を適合させ合う」(Blumer, 1969, p. 17, 邦訳21頁)過程の産物(product)として認識されていた。

ところで、行為者は、自身の活動を自らの世界に適合させるために「考慮の考慮」をお

こなう。ならば、その行為者の活動がその世界に一旦適合してしまえば、その行為者は、その時点で用いている「図式」を繰り返し使用し続けることになる。何故なら、その時点でその行為者によって用いられている「図式」が、その行為者のその世界に対する適応活動を促進し続けている限り、その適応活動を目的にしているその行為者は、その「図式」を変更する必要がないからである。その結果、その行為者の世界に対する行為様式も変化しなければ、その行為者がその世界と取り結んでいる「関係性」も変化しないことになる。この状態が他者の側においても同様である場合、二人の間に形成される「社会」ないしは「ジョイント・アクション」の形態も変化しないものとなる（つまり、社会変動は起きないものになってしまう）。ならば、「社会」が「動的」であるのは、「社会」ないしは「ジョイント・アクション」形成の端緒においてのみになり、結局のところ最終的には「静的」な「社会」をイメージするものとなってしまわないだろうか。換言すれば、一旦成熟した「社会」ないしは「ジョイント・アクション」は、二度と変容・変動しないものとして、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては捉えられている、ということになってしまわないだろうか。

確かにブルーマーも、同形態の「ジョイント・アクション」が安定した状態で再帰的に生起することを認めている(Blumer, 1969, p. 18, 110、邦訳23-24、143頁)。まさにこの点をついたのが、「現状維持的」、「安定的」、「統合的」な社会観というブルーマー批判であった。船津によればシンボリック相互作用論には「一方に、抽象的・一般的個人の観念的・主観的な人間の主体性があり、他方に、現状維持的・安定的・統合的な社会が存在するのである」（船津、1976年、30頁）。この批判のうち、前者の批判については既に第三章においてその非妥当性を指摘しておいた。また、後者の「現状維持的・安定的・統合的な社会」（観）とする批判に対して我々が注意を促したい概念が、本稿第三章第二節において議論した「トークバック」概念なのである。これをブルーマーの「ジョイント・アクション」の議論の中に挟み込もうとするのが我々の本章での目的である。

さて、「ジョイント・アクション」の形成は如何にして可能であったか。第二章第一節における我々の議論をここで再びもち出してくることとしよう。

我々の議論では、社会的相互作用に参加する行為者と他者との双方が「考慮の考慮」(taking account of taking account)をおこない、それに基づいて互いに相手に対して行為し合うとき、そこに「ジョイント・アクション」が形成されるとブルーマーはみなしていた。ここで、「考慮の考慮」とは、他者が考慮に入れていることを行為者自身が考慮に

入れることによって、また、それを他者の側もおこなうことによって、その行為者と他者とが「単に自分が相手のことを考慮に入れているだけではなくして、逆に、自分のことを考慮に入れている相手として、その相手のことを考慮に入れる」ことを意味していた(Blumer, 1969, p. 109、邦訳141-142頁)。さらにその結果として、相手が自分に関して想定していることを、自分自らが想定することになるのであった。これを双方が適切におこなった場合、換言すれば、一方が他方に対して発する身振りが有する三つの意味を、自他の双方が正確に把握した場合に、「ジョイント・アクション」はスムーズに形成されるとするのが、我々が明らかにしたブルーマーの議論であった。

ここで適切な「考慮の考慮」が自他ともにおこなわれている場合、その行為者とその他者との間には「共通の定義」(common definition)が生じているとブルーマーは考えていた(Blumer, 1969, p. 9, 11、邦訳11、14頁)。さらに、この「共通の定義」によって「ジョイント・アクション」の安定した形態が繰り返し生起することが可能になるともブルーマーは述べている。ブルーマーによれば「共通の定義によって、〔ジョイント・アクションの形成〕への参加者には、それを以て自身の行為を他者のそれに適合させるためのはっきりした指針が与えられる。この共通の定義は、人間集団の広い分野にわたって、ジョイント・アクションが規則的であり、安定しており、再起的であるために、何よりも有効なものである」(Blumer, 1969, p. 71、邦訳92頁)。では、このような「共通の定義」は、如何にして参加者達に維持され続けるのであろうか。ブルーマーによれば、それは「ただ単に〔参加者達によって〕同一の解釈図式が絶えず用いられ続けることによってのみ」維持され続けるという(Blumer, 1969, pp. 66-67、邦訳85-86頁)。さらにそのような同一の解釈図式の維持は、「他者〔=互いにとっての相手〕からの〔同形式の〕定義という行為によって絶えず確認され続けることによってのみ」可能であると述べている(Blumer, 1969, p. 67、邦訳86頁)⁽¹⁾。しかし一方で、このような「ジョイント・アクション」は、同一の形態を繰り返し維持するのみばかりではなく、反対に、その形態を変容させることもあるということをブルーマーはすかさず指摘している(Blumer, 1969, pp. 71-72、邦訳92-93頁)。つまり、参加者達が、各々が用いる解釈図式を修正することがあると言っているのである。では参加者達はその修正をおこなう契機とはいったい何であるのか。これを明らかにしえれば、シンボリック相互作用論が有する社会観に対して向けられている「現状維持的」、「安定的」、「統合的」な社会観なる批判に反論することが可能となる。ここで我々が注目したいのが「トークバック」概念である。

分析の焦点を「ジョイント・アクション」の形成に従事している行為者と他者というダイアディックモデルにおこう。その際、行為者にとっては他者が、また、他者にとってはその行為者が（社会的）「対象」(object)（「意味」(meaning)を付与された「物事」(thing))であり、互いが相手に関して「考慮の考慮」をおこなっている。さらに、互いに相手が「対象」であるということは、その相手が互いによって解釈され、定義される存在であると同時に、我々が第三章第二節で明らかにしたように、そのような解釈や定義に「抵抗」ないしは「トークバック」しうる「現実の世界」(world of reality)でもあるということになる。すなわち、複数の行為者間で「ジョイント・アクション」が形成されている場合、行為者と他者とは、互いが相手にとって「現実の世界」としての位置づけをもっており、したがって、互いが相手に対して「トークバック」しうる存在であるということになる。その結果、仮に他者が行為の再設定をおこなえば、そのことは、行為者の側から見た場合、その行為者にとっての「現実の世界」からの「トークバック」を意味する。というのも、その「行為者」に対峙するその「他者」が、その「他者」の「行為」の再設定をおこなうということは、その「他者」の「行為」が、その「行為者」にとっての「新たな物事」(new thing)として立ちあらわれることを意味するからである。

さらに、この「トークバック」を契機として、その行為者が行為の再設定をおこなえば、今度は、他者の側から見た場合、それがその他者にとっての「現実の世界」からの「トークバック」を意味することになる。すなわち、どちらか一方に対して「トークバック」が向けられる時にはいつでも、それが向けられた側は、自己の行為の再設定をおこなうことになり、そのことが他方の行為の再設定を促すことになるのである。双方の行為の再設定がおこなわれれば、両者の間に成立している「ジョイント・アクション」の形態も変化することになる。

では「ジョイント・アクション」のある一定の形態が、維持される場合とは如何なる時であるのか。換言すれば、如何にして「トークバック」の生起を行為者と他者の双方は防ぐことが出来るのであろうか。先に「ジョイント・アクション」は、行為者と他者の双方による「考慮の考慮」によって維持されることを繰り返し指摘しておいた。つまり、「自分のことを考慮に入れている相手として、その相手のことを考慮に入れる」というのがそれであった。この議論を「現実の世界」からの「トークバック」という考え方に基づいて、さらに展開させれば、次のようになる。すなわち、ある行為者は、自分のことを「現実の世界」として、すなわち「トークバック」を發しうる存在として考慮に入れている他者

として、その他者のことを考慮に入れる。平たくいえば、他者によって自分が分からない存在としてみなされている（または、その結果、他者にとって自分は分からない存在となっている）ということその行為者が認識するのである。そう認識する結果、その行為者はどうするのか。もし、その行為者が、その他者との間に「ジョイント・アクション」をスムーズに形成させようとするのであれば、その行為者は、その他者に自分を適切に理解させなければならないことになる。何故なら、「ジョイント・アクション」のスムーズな形成に不可欠な条件は、単に一方の行為者のみ^が他方の他者を適切に理解するのみならず、他者の側もその行為者を適切に理解することだったからである（そうでなければ、必須条件としての「共通の定義」(Blumer, 1969, p. 9, 71、邦訳11、92頁, 1993, p. 179)が成立しえない)。では、如何にしてこのことをおこなうのか。ここで第二章第一節で議論したシンボリック相互作用論の三つの基本的な前提のうちの第二の前提を思い出して貰いたい。すなわち、人間にとっての、ある「物事」の「意味」は、他の者がその「物事」に関して、その人間に対して行為するその様式から生じる、という議論である。すなわちここでは、行為者が自分自身を「物事」とし、その「物事」としての「自分自身」に関して、その他者に対してある一定の様式で行為することによって、その他者に「自分自身」を分かって貰う（その他者にとっての「物事」である「自分自身」を、その行為者が他者に定義することが可能になるのである。簡単な事例として、ある学校に転入してきた学生による、新しいクラスメートに対する自己紹介を思い起こして貰えばよい。さらにこのことを、他者もその行為者におこなうことによって、両者が分かり合うという状況が生まれうるのである（つまり、両者の間に「共通の定義」が発生するのである）。では、互いが相手を理解しえたということ、如何にして行為者と他者の双方は確認しうるのか。いうまでもなく、行為者と他者の双方が、相手からの「トークバック」があるか否かで確認しうるのである。このような過程を経て、両者の間に、ある一定の形態をもつ「ジョイント・アクション」が、スムーズに形成され、そして、維持されうるのである。しかし、先にもブルーマーが指摘したように、この「ジョイント・アクション」は、同一の形態を繰り返し維持するのみばかりではなく、反対に、その形態を変容させることもあるという。何故にか。なぜなら、いくら互いに相手を正確に認識しようとしても、互いが相手にとって「現実の世界」であることにはかわらないからなのである。すなわち、互いが相手にとっては「現実の世界」であり、第三章第二節にてブルーマーの四つのテーゼに関して述べたように、その「現実の世界」とは、人間が如何に正確に認識しようとも、依然としてその人間にと

って「外的領域にある」(out there)「人間によって全く知覚されないかもしれないし、知覚されたとしても不正確にしか知覚されないかもしれない」世界(Blumer, 1980, p. 410)だからなのである。したがって「ジョイント・アクション」、すなわち「社会」は、必然的にその変動への扉を開いてしまうのである。

以上のように我々は、社会の変動という現象を、換言すれば、「社会」が「動的・過程的」である所以を、社会それ自体のメカニズムに帰着させることなく、あくまで個人個人の「自己相互作用」との関わりにおいて論じることを可能とした。つまり、社会の作動原理をその社会それ自体のメカニズムに帰着させるという、ブルーマーが徹底して批判した立場(Blumer, 1969, pp. 19-20、邦訳24-25頁)とは、対照的な位置にあるブルーマーのシンボリック相互作用論の立場(Blumer, 1969, p. 20、邦訳25頁)を説得的に提示することが出来たのである。そのブルーマーの「立場」を、ブルーマーは『シンボリック相互作用論』の第1章の第1部「シンボリック相互作用論の特性」の結論部にて、以下のように要約している。

「このアプローチ〔シンボリック相互作用論〕では、……人々は、その中で、展開途中にある自らの行為を互いに適合させ合わなければならないような、巨大な相互作用過程の中にいるものとして理解される。この相互作用過程は、他者に対しては何をするべきかに関する指摘をおこない、また、他者からの指摘を解釈するということから成り立っている。彼等は対象からなる世界に住んでおり、この対象の意味によって、自らの適応活動や行為に方向づけが与えられる。彼等の対象は、自分自身という対象も含めて、彼等が互いに相互作用することを通じて、形成されたり、維持されたり、弱められたり、変容されたりしてゆく。……人々は互いに異なった様式でアプローチし、異なった世界に住み、異なった意味のセットに基づいて、自身の行為を方向付けてゆく。にもかかわらず、研究されているのが、家族であれ、少年非行のグループであれ、企業であれ、政党であれ、我々はそこに、指摘と解釈の過程を通して形成されるものとしての集合体の活動を見い出さなくてはならないのである。」(Blumer, 1969, pp. 20-21、邦訳26-27頁)

まさに伊藤も言うように、ブルーマーが指摘してやまない最大の問題とは「こうした過程〔自己相互作用の過程〕を等閑視して、社会的相互作用を語り、マクロな社会の形成・存立・変動を語ることの無意味さ」(伊藤、1995年、120頁)なのである⁽²⁾。我々が本稿で明らかにしたのは、まさにこのようなブルーマーの問題提起に対する、ブルーマー自身の回答に他ならない。

あとがき

本稿を終えるにあたって、ブルーマーのシンボリック相互作用論に残された課題を提示しておきたい。

本稿のメインテーマを飾ったのは、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「理論」(＝「ルートイメージ」)における、「トークバック」ないしは「例外的実例」の発生を契機とした人々の認識の再構成と、その再構成に起因する「社会」(＝「ジョイント・アクション」)の変動メカニズムの解明であった。またこのメカニズムを解明する過程で、ブルーマーのシンボリック相互作用論に対してかねてより寄せられている「主観主義」批判の克服をおこなった。

しかし、シンボリック相互作用論に対してかねてより寄せられている批判は、「主観主義」批判のみではない。「主観主義」批判に加え、「マイクロ主義」という批判もまた、かねてから寄せられているのである(船津、1993年、45頁)。

先に我々は、本稿の第二章第一節において、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「それがマイクロなレベルであれマクロなレベルであれ、『人間の社会』なるものは結局のところ、すべて『ジョイント・アクション』の『過程』として捉えられる」と述べた。すなわち正確に言えば、ブルーマーのシンボリック相互作用論においては、「社会」という概念に関する「マイクロ・マクロ」という区別は設定しえないのである。この点を指して船津は以下のように述べている。

「したがって、ブルーマーをマイクロ主義者と安易に決めつけることは出来ない。そして、そもそも、マイクロとマクロを区別し、自由、主体、変化をマイクロ次元において、拘束、構造、固定をマクロ次元において取り扱うと規定することは基本的に誤っている。……ブルーマーのシンボリック相互作用論は、むしろ、このような二分法的思考を脱して、マイクロ、マクロの両領域を取り扱う理論なのである」(船津、1993年、59頁)

しかし一方で、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「ルートイメージ」に対しては、それが「マイクロ主義」的であるとの批判が、かねてから寄せられてきている。

いわゆる、ブルーマーのシンボリック相互作用論に対する「マイクロ主義」批判については、ブルーマーとJ・ターナーとの間にも論争が繰り広げられていたし(Turner, 1974)(Blumer, 1947, 1975)、また、ブルーマーのシンボリック相互作用論の「マイクロ主義」的な

性格を否定する見解（船津、1993年）(Maines and Morrione, 1990)と、肯定する見解（ウォーラス・ウルフ、1985年）（村井、1974年）（片桐、1995年、「訳者あとがき」）との双方が存在し、さまざまな議論がおこなわれている。また、この問題に対して、ブルーマーの「シンボリック相互作用論」の「ルートイメージ」をマイクロ分析用の枠組としてみなし、ブルーマーがR・パークより継承した「集合行動論」(Collective Behavior)の「ルートイメージ」（たとえば(Blumer, 1969b)）をマクロ分析用の枠組としてみなして、取り扱う領域によって双方を使い分けるという案を提示している論者もいる（植村、1989年a) b)）。また船津も、ブルーマーのこの「集合行動論」の「ルートイメージ」を、それが「相互作用論」の手法によるマクロ分析への扉を開くものとして評価している（船津、1989年、232頁以下参照）。

このあとがきでは、あくまで「シンボリック相互作用論」の文脈にこだわり、この文脈において、ブルーマーに対する「マイクロ主義」批判に対して、もっとも体系的な反論を試みていると思われるメインズ等(Maines and Morrione, 1990)の見解を吟味しておくことにしよう。

メインズ等によれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論の基本的な立場は、「社会〔構造〕はその内部で集会的な行為が生じる枠組みではあるが、その枠組みは、そのような人間の活動のすべてを決定するものではない」として、いわゆる「社会構造」(social structure)を概念化するものであった(Maines and Morrione, 1990, xiii、邦訳9頁)。確かに、彼らのこの説明は、ブルーマーの1969年の『シンボリック相互作用論』における説明と一致するものである(Blumer, 1969, pp. 78-89、邦訳101-115頁)。

しかし、まさにこのようなブルーマーの立場に対して、それが非構造的なバイアス(a-structural bias)を負っている、すなわち、ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論枠組みが「社会構造」＝「マクロな領域」を取り扱えないとする批判が向けられたわけである(Maines and Morrione, 1990, xiii-xv、邦訳9-11頁)。ここでメインズ等は、スメルサーによるブルーマー批判を念頭に置いている。彼らが引用したスメルサー批判とは、以下のようなものであった。

「社会学的な分析の中心には、社会構造についての考察がおかれるべきものであり、・・・ブルーマーは、この立場〔社会構造を取り扱うという社会学者の立場〕から、社会学者として可能な限りもっとも離れたところに位置した。我々がウェーバーにおいて見い出

したような、主観的立場(the subjective)から構造的立場(the structure)へと移行する努力は〔ブルーマーには〕全く見受けられない。・・・如何なる〔社会〕現象も〔それを担う〕個々人の意味の体系という文脈において把握されるべきであるという〔社会学者一般とは〕異なった研究手法を取ろうとするがために、シンボリック相互作用論が有するパースペクティブは、〔主観的立場から構造的立場へと移行する〕すべての可能性を、(そして、〔シンボリック相互作用論が〕科学というステータスを得る可能性のすべてを)否定(deny)してしまった。」(Smelser, N., 1988, "Social Structure", p.122 Smelser(ed.), "Handbook of Sociology", Sage Publications, pp.103-129, quoted in Maines and Morrione, 1990, xiv-xv, 邦訳10-11頁)。

このような批判に対して、メインズ等は以下のように反論してゆく。

「ブルーマーの著作の数々を素直に読めば、スメルサーや、スメルサーと同様の見方をする他の論者が、〔ブルーマーの著作に対して〕根本的に誤った解釈をおこなっていることが明らかとなるであろう。確かにブルーマーは、〔個々の行為者による〕意味のやりとり(transactions of meaning)というものを重視してはいるが、彼はそのようなやりとりがあらゆる規模〔の行為者間〕で存在するものと見ている。これと同じ理由で、彼が行為者に言及する際に『活動単位』(acting unit)という用語を用いていたことを指摘しておく必要がある〔(Blumer, 1969, p. 85, 邦訳110-111頁)〕。すなわち、行為者は常に個人であるわけではない。それは親族でも、協同組合でも、エスニック・グループ(ethnic groups)でも、国際的なカルテルや兼任役員会(interlocking directorates)でも、もしくはそれ以外の形態の集合体でもありうるのである。さらに言えば、人間の活動は常にさまざまな状況(situations)の中で生じるのであるが、それらの状況もまた規模において変化するものであり、対面的なもの(face-to-face encounters)から経済市場まで、さらには国際的な権力関係にまで広がるのである。・・・スメルサーは、このようなブルーマーのパースペクティブの射程の広がりを見逃したのであり、『行為者』を個人と等置する誤りによって、ブルーマーは主観主義〔ここではマイクロ主義という意味で用いられている〕であると誤って批判することになったのである」(Maines and Morrione, 1990, xv, 邦訳11-12頁)。

このような論調で、彼らは、ブルーマーが、シンボリック相互作用論の手法によって、

社会構造の分析=マクロ社会学の内容(制度、社会階層システム、経済システム)と言われているものを取り扱っていたとしている(Maines and Morrione, 1990, xvi、邦訳13-14頁)。

メイNZ等の見解を要約的に述べるならば、ブルーマーのシンボリック相互作用論において、「行為者」ないしは「活動単位」とは、個人のみを表すのではなく、そこには集団も含まれており、ミクロな状況を分析する際には、それを個人と他の個人との相互作用として捉え、マクロな状況を分析する際には、それを集団と他の集団との相互作用として捉えたとするものである。たしかに、こうした見解には理論上の問題はないように思われる。「行為者」を「個人」と等置する場合には、その「個人」の行為が「自己相互作用」を通じて形成されるものと考え、「行為者」を「集団」と等置する場合には、その「集団」の行為が「社会的相互作用」(social interaction)を通じて形成されるものと考え、という手続きを踏めば、理論上の問題はおきない。さらにミクロな社会組織を分析する際には、「ジョイント・アクション」を、それが「個人」と「個人」から形成されるものとして捉え、マクロな社会組織を分析する際には、それが「集団」と「集団」とから形成されるものと考えれば、たしかに理論上の問題はおきない。またこれはブルーマー自身の考えでもある(Blumer, 1969, pp. 97-98、邦訳126頁)。また、日本において、シンボリック相互作用論の手法を以て、逸脱行動やシカゴモノグラフの研究をおこなっている宝月も、同様の見解を示している。宝月によれば、相互作用論の分析枠組は、個人主体のミクロな社会生活にも、組織体や部分社会を行為者とするマクロな社会生活の分析にも適用することが可能であり、その際、分析レベルが変われば、ある社会生活はより上位の、あるいは、より下位の社会生活の部分として入れ子のように入り込むことになる、と述べている(宝月、1989年、4頁)。

しかし我々の判断では、このような理論的パースペクティブを想定すれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論の場合には、二つの問題が生じてしまう。そのうちの一つは、本稿の結論部に関わるものである。

先にも述べたように、シンボリック相互作用論者としてのブルーマーが、指摘してやまない最大の問題とは、「こうした過程〔自己相互作用の過程〕を等閑視して、社会的相互作用を語り、マクロな社会の形成・存立・変動を語ることの無意味さ」(伊藤、1995年、120頁)であった。ところが、上述の理論的パースペクティブを想定すれば、ブルーマーのシンボリック相互作用論は、まさに「無意味」なものになってしまう。「マクロ

な社会の形成・存立・変動」を、あくまで「自己相互作用」の過程、すなわち、「行為者〔＝個人〕の見地」から明らかにしてこそ、ブルーマーのシンボリック相互作用論は「シンボリック相互作用論」足り得るのである。そして、もうひとつの問題とは、方法論上のものであるが、まさにその「行為者の見地」に関わるものである。。

ブルーマーのシンボリック相互作用論の方法論的な鉄則に「行為者の見地」(position of the actor)からのアプローチというものがある(Blumer, 1969, pp. 56-57、邦訳71-72頁)。すなわち、シンボリック相互作用論の立場に立つ研究者は、人間の集団生活(human group life)ならびにそれを構成する人間の行為を、それを担う行為者の役割を取得し、その立場から研究しなければならないとする方法論的な要請であった。また、シンボリック相互作用論の場合、理論的パースペクティブと方法論的姿勢とが渾然一体となって、それ独自の社会学・社会心理学理論としてのアイデンティティを有していた。船津によれば「シンボリック相互作用論は、一方に、シンボル動物としての人間の特性を重視し、シンボルによる人間の主体的あり方を問題とし、他方に、行為者の見地に立って、人間の内的側面を明らかにする独自の接近法をとっている。まさに、この点において、シンボリック相互作用論は機能主義をはじめとするこれまでの社会学のあり方とは異なり、それとは対立する位置に自己をおく」(船津、1989年、214頁)のである。さらに、ブルーマーの「シンボリック相互作用論」とは、「哲学学説」としてのそれではなく、「経験的な社会科学的パースペクティブの一つとしてのシンボリック相互作用論」(Blumer, 1969, p. 21、邦訳27頁)であった。すなわち、「人間の集団生活と人間の行動に関する検証可能な知識を生み出すことをその目的とするアプローチ」としての「シンボリック相互作用論」であった(Blumer, 1969, p. 21、邦訳27頁)。したがって、それはある一定の理論的パースペクティブとそれを検証可能なものにするための実行可能なメソッドとが一体となってかみ合ったものでなければならない。すなわち、とりわけブルーマーのシンボリック相互作用論においては、理論と方法論との分離・不整合は許されえないのである。ならば、もしメイNZ等やブルーマーが考えるように、「行為者」を「集団」と等置するならば、研究者はこの「集団」全体の役割を取得しなければならないことになる。しかしそのようなことが如何にして可能であるかについては、ブルーマーは何も述べていないに等しい。ブルーマーはJ・ターナーのマイクロ主義批判(Turner, 1974[1992, p. 115])に対する反論の中で、シンボリック相互作用論の方法論でもマクロな分析が可能であるとして、ブルーマーの論文「労使関係の社会学理論」(Blumer, 1947)を参照するよう示唆しているが(Blumer, 1975,

p. 61)、その結論部において次のように述べている。

「労使関係の分野において、大規模で複雑な形式で観察をおこなわなければならないというのは、不幸ではあるが、現実にそくすためには致し方ないことである。労使関係での観察の意義と近代的な戦争における偵察の意義には相通じるものがある。自らの偵察地点にいるある兵士には、その兵士の能力が如何に優れていようとも、戦場全体で何が起きているのかを知ることはできない。社会学者がある工場で観察をおこなう場合にも、きっと同じ限界を感じることであろう。適切な観察をおこなうためには、観察者はそのフィールドで起こっていることを感じとり、さまざまな役割と取得し、さまざまな状況を判断し、そうすることを通じて、そのようなさまざまな事柄をある統一された形式にまとめあげるといふ、困難なことをおこなわなければならない。我々がそれを好む好まないに関わらず、このような観察が的確であるためには、高度な創造力を伴った研究者の判断が必要とされるのである」(Blumer, 1947, p. 277)

この言説の中では、確かにブルーマーは、シンボリック相互作用論が自らの研究領域をミクロに絞るべきであるとは述べていない。しかしながら、同時にマクロな領域に対して如何なる方法論で接近するのかも述べられていない。

社会理論の中心に「自己相互作用」概念を据え、「行為者の見地」を把握することを方法論的な鉄則として遵守した上で、如何にしてマクロ分析をおこなうのか。これが、ブルーマーのシンボリック相互作用論に残された克服すべき課題の最たるものであると言えるよう。

第一章 註

(1)

吉原によれば、「二つの流れ」とは、一つには上述の「シンボリック相互作用論」を指し、もうひとつには、都市社会学の領域での理論的、経験的研究の復興に寄与したと言われるジャンヴィッツ(Janowitz, M.)を中心とするシカゴ学派の「第四世代」を指す(吉原、1989年、24頁)。このうち前者について、吉原は以下のように述べている。

「〔二つの流れのうち〕一つはHerbert Blumerに代表されるSymbolic interactionismの流れである。自我^{***}の探求に焦点を据えて立ちあらわれたこれらの学派は、まぎれもなくMeadの仕事に源を発し、Thomas, Park, Hughesの影を追っていた。」(吉原、1989年、24頁)

現在、この「シンボリック相互作用論」は、アメリカ社会学界において決して少数派の理論ではなく、「現代社会学の主要潮流の一つ」(船津、1993年、45頁)を形成するものとなっている、との位置づけが種々の論者によってなされている(船津、1990年、15-16頁)(宝月、1984年、84頁)(片桐、1991年、45頁)。さらに後藤によれば、シンボリック相互作用論は「現象学的社会学、エスノメソドロジー、解釈学的社会学、役割理論、レイベリング理論、ジェンダー論などといった、社会学および社会心理学の諸学派・諸領域に、顕在的・潜在的な影響を与え続けている」のである(後藤、1991年、274-275頁)。

一口に「シンボリック相互作用論」と言っても、そこにはたとえば、自我の経験的・実証的研究に取り組む「アイオワ学派」や、人間の主体的あり方を解明しようとする「シカゴ学派」、そして、ミード理論をワトソン流の行動主義との関連において再検討し、独自の社会的行動主義の展開をめざそうとしている「イリノイ学派」、さらにはE・ゴフマン(Goffman, E.)を中心とする「ドラマ学派」等があるが(船津、1995年、4頁)(宝月、1984年、84頁)(土肥、1989年、188-194頁)、本稿では、シンボリック相互作用論を検討するに際して、そのような種々のシンボリック相互作用論の中でも、「現代のシンボリック相互作用論の特徴を余すところなく表現し、包括性、体系性において、他を凌駕し、今日のシンボリック相互作用論のよるべき大樹」(船津、1976年、

40頁)としての位置づけをもつとされる、ブルーマーのシンボリック相互作用論を素材として選択する。後藤は、このブルーマーのシンボリック相互作用論のマスターピースである『シンボリック相互作用論』(Blumer, 1969)について「戦後アメリカ社会学は、本書(または本書に代表される社会観・社会科学観)を抜きにしては話れない」(後藤、1991年、275頁)とも述べている。

(2)

ブルーマーのシンボリック相互作用論が、何故に「シカゴ・ルネサンス」の一翼に位置づけられているのか。私見では、ブルーマーのシンボリック相互作用論による、上述のミード思想の継承という点に加え、さらに二つの要素をこのシンボリック相互作用論が継承しているが故に、それは「シカゴ・ルネサンス」の一翼に位置づけられていると思われる。この点については、宝月誠の次の議論が手がかりとなる。

宝月によれば、シカゴ学派には、三つの特徴があり(宝月、1990年、114-116頁)、私見ではそれら三つの特徴をブルーマーのシンボリック相互作用論は継承している。その三つの特徴を、宝月は以下のようにまとめている。

1) 第一に、A・スモール(Small, A.)によって紹介され、その後、R・パーク(Park, R.)によって積極的に導入された、G・ジンメルの社会学のシカゴ学派社会学に対する影響を見ることが出来る。個人や社会を絶対的な統一体として認識するのではなく、それらを、諸要素間の絶え間ない相互作用の過程として見るジンメルの考え方が、シカゴ学派では「社会過程」(social process)の重視として継承されていった。

2) 第二に、シカゴ大学哲学科の教授であった、G・H・ミードやJ・デューイ(Dewey, J.)のプラグマティズム(pragmatism)の思想の、シカゴ学派社会学に対する影響を見ることが出来る。とりわけミードが展開した「有意味シンボル」(significant symbol)による人々の相互適応過程や、「自我」(self)に関する理論的フレームワークが、行為者達の社会生活を分析する上でのキー概念として、シカゴ学派では用いられるようになっていった。

3) 上記のような二つの思想に支えられたシカゴ学派社会学は、自ら第三の特徴を発展させることになる。その特徴とは、研究対象(=行為者達の社会生活)の「内側からの把握」の重視である。シカゴ学派社会学では、被観察者の世界を理解するためには、被観察者の経験や意識を通じて、その世界に接近しなければならないと考えられるようになっていった。また、そのような考えを具体的に実行する手段として、観察者すなわち研究者が、被

観察者の世界に直接身をおくことになる、参与観察や日記、手紙、自伝その他の「ヒューマン・ドキュメント」(human document)が駆使されるようになっていった。

まず1)に関しては、人間の社会は諸個人の絶え間ない「社会的相互作用」(social interaction)を通じて形成されているという考え方として、ブルーマーのシンボリック相互作用論に継承されている(後述の「ジョイント・アクション」(joint action)の議論を参照のこと)。また2)に関しては、そのもっとも強い影響を、ブルーマーのシンボリック相互作用論の柱石として位置づけられている「自己相互作用」(self interaction)概念に見ることが出来る(後述)。さらに3)の点は今や、ブルーマーのシンボリック相互作用論の方法論を特徴づける最たるものとなっている。船津も言うように「・・・質的データを利用することによって行為者の内的側面を明らかにする行為アプローチが、ブルーマーのシンボリック相互作用論の具体的〔な方法論上の〕手続き」なのであり、「それは研究者をして第三者的に事象を把握し、現実から遊離してしまうのではなく、より現実に接近し、行為する人間の奥底に深く入り込んで行くことを可能にさせるものである」(船津、1976年、76頁)。

このようにして、ミードの思想の継承のみならず、「社会」をどのように捉えるかという点や、方法論の側面においても、シンボリック相互作用論は、「シカゴ・ルネサンス」の一翼に位置づけられているのであり、後藤も言うように、シンボリック相互作用論の原型は、今世紀初頭のシカゴ学派の社会学にあるのである(後藤、1991年、274頁)。

無論一方で、ブルーマーのシンボリック相互作用論によるミード思想の継承という論点に関しては、ミード思想の中でも、とりわけ「自我」に関するブルーマーの理解の是非をめぐって、周知のように、ブルーマーとR・ベールズ(Bales, R.)等との間で激しい論争が繰り広げられていた(村井、1974年、53-54頁)(小笠原、1993年、31-57頁)。この論争は『アメリカ社会学雑誌』(American Journal of Sociology)の誌上、6回にわたって展開されたものである。そこで論争の焦点となっているのは、ミードのいわゆる「自我」の捉え方であった。この論争のきっかけを作ったブルーマーによれば、「自我」は、「構造」(structure)としてではなく、「過程」(process)として把握されなければならない。ブルーマーによれば、「自我」とは、「主我」(I)と「客我」(Me)との相互作用に他ならない。しかしベールズは、ブルーマーによるこのようなミード理解は誤っていると、ほぼ全面的にブルーマーの諸説を批判している。ベールズによれば、ミードは、「主我」を「過程」として、一方「客我」を「構造」として区別したのであり、し

たがってまた、この両者は「自我」のそれぞれに異なった二つの側面である、とベールズは言うのである。ブルーマーは、このようなベールズの見解に対して、一方の「主我」が「過程」で、他方の「客我」が「構造」であるなどという理解は無意味であると反論しているが、この論争に参加したその他の論者（ウォルフエル(Woelfel, J.)、ストーン(Stone, G. P.)、フェーバーマン(Faberman, H. A.)等)は、ベールズの見解を支持し、この論争には一応の決着がついた(in Hamilton(ed.)pp. 30-46転載)。しかし、ブルーマーのシンボリック相互作用論を検討することを主たる目的としている本稿においては、船津にならい(船津、1976年、25頁)、ブルーマー支持の立場に立って、論を展開することにしたい。

(3)

このようなブルーマーの立論は、プラグマティズムの思想と深く関連している。

シンボリック相互作用論が、「まず何よりもプラグマティズムの影響下にアメリカで誕生」(マーチンデール、1970年、406頁)したことは今や周知のことであるが、もとよりブルーマーのシンボリック相互作用論の場合も例外ではない(船津、1976年、27頁)。ハーマスレイによれば、そのプラグマティズムの思想においては、科学や哲学とは、人間の理性的思考の雛形として認識されていた(Hammersley, 1989, p. 46)。ハーマスレイは以下のように述べている。

「哲学ならびに科学は、日常生活における諸問題から現れ、その問題の解決に向けられる。・・・多くのプラグマティスト達は、科学を、人間の知識がそうあるべき雛形として見ており、同時に、人間の知識を発展するものとして、その結果として、人間同士の相互適応(mutual adjustment)ならびに人間のその環境に対する適応を、漸進的に促進するものとして見ていた。」(Hammersley, 1989, p. 46)。

さらにこのような思想が、ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論と方法論の形成過程に多大な影響を与えたとハーマスレイは見ている。ハーマスレイによれば、「シカゴ学派社会学、そしてハーバート・ブルーマーの方法論的な諸見解の展開に対して、最も重要な影響を与えた哲学思想はプラグマティズムであった。ブルーマーやその他のシカゴ学徒が、人間の社会的生活の特性に関する自らの諸見解の多くや、同時に、方法論的な見解の幾つかを引き出したのは、まさにこのプラグマティズムからであった」(Hammersley, 1989, p. 44)。

このようなハーマスレイの見解を事実ブルーマーも認めている。ブルーマーにとって科

学(science)とは、人間の内省的知性(reflective intelligence)の理想的形態を意味する。また科学的手法とは、日常的手法を単に伸長(extention)ないしは洗練(elaboration)させたものに他ならない。ミード同様に、ブルーマーのシンボリック相互作用論においてもこの考え方は変わらないとブルーマーは述べている(Blumer, 1980, p. 415)。さらに、ブルーマーが提示する(社会)科学的手法としての自然的探求(naturalistic investigation)法(=ブルーマーのシンボリック相互作用論の「方法論」)も、人間の内省的知性が単に洗練されたものとして位置づけられているのである(Blumer, 1980, p. 415)。ブルーマーは、このような知見を、ミードの『19世紀の思想動向』(Mead, 1936)と『行為の哲学』(Mead, 1938)をもとに構想したと明言している(Blumer, 1980, pp. 415-416)。

(4)

ミードは、「自我」の二側面のうち、「主我」を「他者の態度に対する人間有機体の反応」であるとし、「客我」を「他者の態度(とその有機体が想定しているものの)組織化されたセット」であるとしている(Mead, 1934, p. 175、邦訳187頁)が、船津によれば、このミード「自我」論においては、「人間の主体性を形づくるものとして『主我』の概念が提示されている」(船津、1989年、223頁)という。しかし一方で、その「主我」概念が有する、その最大の欠点は、その内容の「あいまいさ」にあるという(船津、1989年、223頁)。その証拠に「この概念をめぐる激しい論争すら引き起こされている。すなわち、『主我』の概念に関して、現在、少なくとも三つの解釈が存在し、しかも、互いに他を批判し、自己の正当性を主張している」という状況にある(船津、1989年、223頁)。その「三つの解釈」のうちの一つは、「主我」を生物学的衝動として捉える「衝動説」の立場であり、二つ目は、「主我」を「客我」の残りすべてと捉える「残余カテゴリー説」の立場であり、三つ目は、「客我」を内的・生理学的「態度」であると規定し、「主我」をその「客我」に対応する外的・身体的「反応」であると規定する「反応説」の立場である(船津、1989年、223頁)。以下、船津によるこの「三つの解釈」のそれぞれに対する見解を説明しておこう。

まず「衝動説」に対しては、それを「自我」の社会性が捉え切れていないものであるとして船津は批判している。船津によれば「この考え方は、何よりも、自我の社会性という性質を看過してしまっている。しかも、この生物学的衝動を『主我』の内容とすることは、人間を非社会的存在とし、主体的存在のレベルから引き降ろしてしまうことになる。そし

て、誕生直後の赤ん坊や、犬や猫などの動物の方がより主体的であることになりかねない」(船津、1989年、223頁)。

次に「残余カテゴリー説」に対しては、「その場合〔『客我』概念におさまらない部分すべてを『主我』の内容であるとする場合〕、『主我』は一体何であるのかという問いに対する回答を保留してしまうことになる」(船津、1989年、223頁)と船津は批判している。

最後に「反応説」に対しては「この解釈は人間の内的側面を無視してしまい、人間の主体性を問題としないものとなっている。したがって、ここではミードが『主我』概念を措定した意義〔人間の主体性を説明するという意義〕が完全に否定されることとなる」(船津、1989年、224頁)と船津は批判している。

(5)

上述の、船津が批判した「主我」概念に対する「三つの解釈」のどれよりも、より有効な「主我」論として船津が挙げるのが、ブルーマーの「解釈過程」ないしは「自己相互作用」の議論なのである。船津は以下のように述べている。

「このような『主我』概念のあいまいさを克服するために、ブルーマーは『自分自身との相互作用』〔=『自己相互作用』〕と『解釈過程』の存在を図式的に提示した。それによって、自我についての分析的解明と理論的定式化の可能性が与えられた。」(船津、1989年、224頁)

(6)

何故にブルーマーは、「社会」が、それ自体のメカニズムに基づいて作動するという理論的立場を誤りであるとして批判したのか。この点に関してさらに精確に追求するためには、本稿で述べた理論上の理由の他に、ブルーマーのシンボリック相互作用論が生まれた土壌であるアメリカ社会と、ブルーマー理論との関係に関する知識社会学的研究が必要となるが(下田、1987年、349-350頁)、本稿ではそれをおこなう余裕はない。

第二章 註

(1) この論文は、実際には、ブルーマーが1973年に、カリフォルニア大学バークレー校で「社会的相互作用とパーソナリティの組成」(Social Interaction and Personal Organization)という題目の下に講義をおこなったものを編者が筆記したノートから構成されている。しかし、この講義録は、その編者も言うように、ブルーマーの講義と一語一句同じではなく、編者自身が種々のブルーマー批判を念頭に置いて、かなりの編集を施している(Athens, 1993, pp. 157-158, 159)。したがって本稿では、この講義録を編者も言うようにブルーマーと編者との共著(joint product)(Athens, 1993, p. 157)として捉え、ブルーマーの1973年の論文としてではなく、1993年の論文として位置づけている。

(2)

ところで、先にも説明したように、シンボリックな社会的相互作用において「定義」とは「指摘」のことを指していた(Blumer, 1969, p. 66、邦訳84頁)。そうである以上、自分自身とのシンボリックな社会的相互作用＝「自己相互作用」とは、自分が如何に行為すべきかに関する「指摘」を、自分自身に対しておこなうことを指していることになる。さらに付言すべきことは、先に議論したシンボリック相互作用論の三つの基本的な前提においては、第二の前提において提示されていた「他者からの定義」は、第三の前提が示していたように、その定義を与えられた「行為者によって解釈」されていたという点である。ならば、そのような社会的相互作用が内在化されたものである「自己相互作用」の中にも、この第三の前提が含意するところが含まれていることになる。つまり、「自己相互作用」の過程には、ある個人が自分自身に対しておこなう「定義」ないしは「指摘」を、その個人自身が「解釈」というプロセスが含まれていることになる。事実、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、この「自己相互作用」は(自己への)「指摘」(indication)とその「解釈」(interpretation)という二つの過程から構成されるものであると説明されている(Blumer, 1969, p. 5、邦訳6頁)。

(3)

ここで「考慮に入れる」(take into account)とは、ブルーマーの「ルートイメージ」においては、「自己相互作用」の過程を通じて、「意味」を付与することと同義として扱われている。ブルーマーによれば「自分が考慮に入れる物事とは、すなわち、自分が自分自身に指摘した物事である」(Blumer, 1969, p. 64、邦訳83頁)。

(4)

しかし、その行為者（被害者）は、自らが想定した内容が適切なものであるか否かを、如何にして確認することが出来るのか。この点については、次節の「主観主義」批判を参照のこと。

(5)

この論点については、本稿末にて問題とする（本稿第四章「あとがき」へ）。

第三章 註

(1)

本稿の文献リストに掲載されている、船津の全著作を見る限り、ブルーマーのこの「トークバック」概念に対する言及は見られない。リストに掲載されている他の邦文献を見ても、この概念に対する言及はない。この概念に対して明確な言及をおこなっているのは、リストに掲載されている文献の中では、マリオオーネの論文(Morrione, 1988)のみである。また、我々は、この概念に対する言及を、「方法論」の文脈（桑原司、「H. G. ブルーマーの社会学的方法論の特質」、第41回、東北社会学会大会、1994年）と「理論」（ルートイメージ）の文脈（桑原、「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における『行為者と世界との関係』再考」、第42回、東北社会学会大会、1995年）の双方の文脈においておこなった。

(2)

『シンボリック相互作用論』において、ブルーマーが展開している「自然的探求」という方法論的な立場について、簡単にではあるが、説明しておきたい。

ブルーマーによれば、「経験科学」(empirical science)の一分野である「シンボリック相互作用論」は、その方法論的なスタンスとして何よりも「経験的世界(empirical world)の特性を尊重」しなければならない(Blumer, 1969, p. 60、邦訳76頁)。ここで「経験的世界」とは、研究対象である行為者達によって営まれている「人間の集団生活」(human group life)ないしは「集合的活動」(collective activity)を意味し(Blumer, 1969, p. 35, 38-39、邦訳45、49頁)、それは必然的に研究者の外部に位置する領域である(Blumer, 1

1969, p. 23、邦訳30頁)。そして通常、研究者はその世界を「よく知らないところから」出発する(Blumer, 1969, p. 36、邦訳46頁)。この「集団生活」ないしは「集合的活動」を、それを担う「行為者の見地」から捉えようとするのが、ブルーマーの方法論的な立場に他ならない(Blumer, 1969, p. 86、邦訳111-112頁)。しかし研究者は「人間が一般的にそうであるように、自分自身が既に抱いているイメージの虜である」。このため、「他者〔すなわち、研究対象である行為者〕も、ある特定の対象を、自分、すなわち研究者が見ているのと同じように見ていると想定してしまう傾向がある」。したがって研究者は、「この傾向を防がなくてはならないし、自分自身もつイメージを自覚的に検証することを優先的におこなわなくてはならない」(Blumer, 1969, p. 52、邦訳66頁)とブルーマーは述べている。それをおこなう具体的手段としてブルーマーが提起するのが、「自然的探求」なる研究手法である。ブルーマーによれば、「自然的探求」(naturalistic investigation, inquiry)とは、「探査」(exploration)と「精査」(inspection)という二つのステップからなる。

まず「探査」とは、研究者がこれまで馴染みのなかった研究対象の諸側面を「身近に幅広く知る」段階を指す。ブルーマーによれば「探査的研究の目的は、条件が許す限り、研究領域についての包括的で正確な像を、十分に描き出すことにある」(Blumer, 1969, p. 42、邦訳53頁)という。つまり、「探査」とはデータ収集の行程を意味する(Blumer, 1969, p. 46、邦訳59頁)。またこの段階において、よく言われる「質的データ」ないしは「ヒューマンドキュメント」(human document)が援用されることになる(Blumer, 1969, pp. 118-119、邦訳153-155頁)。

次に「精査」とは、ブルーマーによれば「分析のために用いられるあらゆる分析的要素の経験的内容に関する、鋭く焦点を定めた検討であり、同様の検討を分析的諸要素間の関係についてもおこなう」(Blumer, 1969, p. 43、邦訳55-56頁)ということの意味する。つまり、この段階で、先に収集したデータの分析がなされるわけである(Blumer, 1969, p. 46、邦訳59頁)。またここで登場する「分析的要素」(analytical element)が、ブルーマーの方法論で有名な「感受概念」(sensitizing concept)としての役割を果たすことになる。すなわちその「分析的要素」は、研究者が「経験的事例にアプローチする際に、何を考慮すべきかとか、その事例に如何にアプローチするかについての大まかな感触を与え」、研究対象である経験的事例に接近するための指針を与えるという役割を果たすことになるのである(Blumer, 1969, p. 148、邦訳192頁)。また、ここで「分析的要素」とは、要するに

社会学者が用いる社会学の概念ないしは社会学言語のことを指している。ブルーマーによれば「分析的要素ということで私が想定していることは、分析において、主な項目として採用されるあらゆる種類の一般的なカテゴリーないしは項目である。統合、社会的移動、同化、カリスマ的指導性、官僚制的関係、権威システム、異議の抑圧、モラル、相対的剥奪、態度、制度的コミットメント等がそれにあたる」(Blumer, 1969, p. 43、邦訳56頁)。

さて、このような二つのステップからなる「自然的探求」が含意することは、ブルーマーによれば「〔研究者の〕研究指針(guiding ideas)と経験的観察(empirical observation)との絶え間ない相互作用(continuing interaction)」であるという(Blumer, 1977[1992, p. 154])。より具体的に述べれば、「自然的探求」法とは、経験的な観察を通じて、絶えず、研究者自らが研究対象である行為者に対して抱いているイメージないしは認識を、検証(test)または改訂(revise)するという研究手法を意味しているのである(Blumer, 1969, p. 40、邦訳50-51頁)(Blumer, 1980, p. 410)。では、研究者は如何にして、そのような検証や改訂をおこなうことができるのか。換言すれば、研究者は如何にして、自らのイメージないしは認識が妥当なものであるか否かを知ることができるのか。ブルーマーはそれを、研究対象である「経験的世界」からの研究者への「抵抗」(resist)ないしは「トークバック」(talk bak)を手がかりとしてなされうると述べている(Blumer, 1969, pp. 21-23、邦訳27-30頁)。またそのようにして、「経験的世界」の「ありのままの今ここにおける特性」(natural, ongoing character)を把握しなければならないとブルーマーは考えていたのである(Blumer, 1969, p. 46, 47-52, 86、邦訳59、60-66、111-112頁)。

以上のようなブルーマーの方法論的な立場を、下田は以下のように評している。

「要するにブルーマーの言わんとするところは、前もって構成された固定的な分析的概念や、理論やモデルを、経験的世界に無理矢理あてはめて、それによって〔その〕世界を理解してはならないということ、研究者は直接経験的世界を吟味して、その上で分析的諸要素の意味やその関係を確定せよ、ということに尽きる。そこには具体的な分析の方法と言えるほどのものは何も準備されていない。」(下田、1987年、71頁)

このように評した上で、下田は、ブルーマーの方法論を「日常言語」と「社会学言語」との対応を求める「経験主義的方法論」と定義づけている(下田、1987年、71、362頁)。また、ブルーマーの方法論をもっとも包括的に論じているバークも、ブルーマーのこの方法論を「見て確認するだけの経験主義」(look-and-see empiricism)ときびしく批判している(Baugh, 1990, ch. 2)。このような批判に対して、ブルーマーの方法論を検討し

直すことは、第一章で述べたように、本稿でのテーマではないが、その検討をおこなっている著作として、中心的にはN・K・デンジンの『リサーチアクト』(Research Act) (Denzin, 1989)が挙げられる。

(3)

ブルーマーは、この「パースペクティブ」という概念をミードから継承したものであるが、一方で、ミードにとって「パースペクティブ」とは単なる「ものの見方」ではなく“there in nature”に客観的に存在する「関係性」のことをあらわす(徳川、1993年、25、30、31頁)という徳川の解釈もある。徳川は以下のように述べている。

「〔ミードにとって〕パースペクティブとは、この意味で“there in nature”であり、“objective reality”なのだろう。『対象のパースペクティブ』というこの表現からも知れる通り、それは通常に理解されているような、単なるものの見方や認識枠組みではないのだし、そのobjectivityというのも、認識枠組みの共有や客観性を言っているのではない」(徳川、1993年、36頁)

(4)

しかし一方で、この「現実の世界」の独自の論理の内実に関する考察は、ブルーマーによってはなされていない。この「現実の世界」という概念自体は、もともとミードの概念であるため(『行為の哲学』(Mead, 1938))、その内実を明らかにすることは我々の今後の課題となる。

(5)

この相互影響ないしは相互作用の内実を、ブルーマーは後の論考において、ミードの「個人的行為」(individual act)の知見(おそらくは『行為の哲学』(Mead, 1938))を手がかりに明らかにしている。

ブルーマーによれば、ミードはこの個人的行為の分析に際して、その基礎的な四つのステージを明確にしたという。それは「衝動(impulse)、知覚(perception)、操作(manipulation)、そして完結(consumation)」の四つである(Blumer, 1993, p. 188)。

まず「衝動」のステージとは、個人的行為の最初のステージであり、「触発された(aroused)有機体〔=行為者〕の行為しようとする傾向」、すなわち、ある刺激によって触

発された行為者の精神的作用という形態において出現する。そしてこの衝動は、その行為者を、その衝動を「充足させようとする」行為へと送り出す(launch)働きをするという(Blumer, 1993, p. 188)。このステージを経て、まず行為者は、自らを「環境」＝「現実の世界」に直面させることになるという。ブルーマーによれば、「この衝動は、有機体を、自らの環境に対処しなければならないような状況に位置づける」のである(Blumer, 1993, p. 188)。さらに、有機体ないしは行為者が、数ある刺激の中から幾つかを選択するのもこの過程である(Blumer, 1993, p. 189)。ここで「環境」ないしは「現実の世界」のある一定の部分に行為者は注目することになる。

次に「知覚」のステージは、先のステージで直面した「環境」ないしは「現実の世界」のある一定の部分、自らにとっての「対象」(object)とする過程を指す。つまり、「意味付与」の過程にあたる。本稿第二章第一節で検討したブルーマーの「自己相互作用」の議論を重ね合わせれば、それは「指摘」と「解釈」のうち、「指摘」の過程を表すことになる。ブルーマーによれば、「知覚とは積極的(active)なものであり、前もって確立されている対象を単に自記する、という消極的なものではない。したがって、知覚対象(percept)とは、有機体自身によって〔環境ないしは現実の世界から〕切り取られた(cut out)ものであるといえる。・・・知覚に従事しているとき、行為者は、前述の対象を形成ないしは切り取っている。行為者はこのことを自己指摘の過程を通じておこなっている」(Blumer, 1993, p. 189)。さらに、ここでの知覚のされ方如何によって、行為者が以後おこなう行為の方向ないし目標が暫時的に定められることになる(Blumer, 1993, p. 189)。またその結果として、その「対象」に対する行為の様式と、その「対象」との「関係性」も暫時的に設定されることになるということはもはや言うまでもない。

次に来る第三のステージは「操作」である。このステージにおいては、先の知覚のステージにおいて形成された「対象」の「意味」を「処理する」(handle)ということがなされる。ブルーマーは明言してはいないが、この過程が「自己相互作用」の過程のうち、「解釈」の過程を表していることは言うまでもない。また、さらに注目しなければならないことは、この過程が純粋に内的な過程ではないということがこの論文では示唆されているということである。すなわち、「対象」の「意味」を「処理する」際に、行為者は、その「対象」に対して外的に働きかけ、その働きかけの結果としてその「対象」から受けた反作用をもとに、その「対象」の「意味」の処理をおこなうということを意味しているのである。つまり、この段階は内的過程と外的過程との相互影響ないしは相互作用の過程とし

て認識されているということなのである。この意味でブルーマーは、この段階における対象の処理を「対象を処理すること、すなわち、実際的に〔その対象と〕接触するという〔その対象との〕関係において処理すること」であると説明している(Blumer, 1993, p. 189)。さらに、その処理がおこなわれた結果「知覚のステージにおいて行為者によって形成された対象の意味が〔このステージで〕検証され(confirm)、そしてもし必要なら、行為者がその後行為をすすめる中で、その行為者によって改訂される(revised)ことになる」(Blumer, 1993, p. 189)という。ここでは、「トークバック」ないしは「例外的実例」の発生、というタームが用いられてはいないものの、明らかに、先ほど議論した「例外的実例」の発生と、その行為者による把握を通じた、既存の知覚の再形成が論じられている。この既存の知覚の再形成が、その行為者がある「対象」と取り結んでいる既存の「関係性」の再構成を促すことはもはや言うまでもない。

個人的行為の最後のステージは、「完結」である。このステージは、ブルーマーによれば「行為者の〔一連の〕行為の完遂によって特徴づけられ、このステージは、個人が最初のステージ〔『衝動』〕において抱いていた衝動を充足させる」(Blumer, 1993, p. 189)ことで終了する。さらに、この充足がなされた結果、行為者は、その「対象」に対してある一定の価値(value)（確定的な「意味」、ないしは確定的な「パースペクティブ」）を付与することになる(Blumer, 1993, p. 189)。つまりここで、前ステージにおいて改訂された「関係性」が、従来取り結んでいた「関係性」にかわる新たな「関係性」として再形成されることになるのである。

第四章 註

(1)

ここで、他者が同形式の定義活動ではなく別様の定義活動をおこなえば、換言すれば、その他者が「新たな解釈を適用する〔別の〕行為者」となれば、その他者の存在は、その他者に対峙する行為者にとっての「例外的実例」の発生、ないしは「現実の世界」からの「トークバック」を意味することになる(Blumer, 1993, p. 171)。

(2)

このような指摘は、実際にブルーマーの主著の随所に見ることが出来る(Blumer, 1969,

pp. 19-20, 74-76, 88-89、邦訳 24-25、95-99、114-115頁)。

参考文献リスト

- ・ Athens, H. L., 1993, "Blumer, s Advanced Social Psychology course", Studies in Symbolic Interaction, vol. 14, pp. 155-162
- ・ Baugh, K. Jr. 1990, "The Methodology of Herbert Blumer", Cambridge University Press
- ・ Blumer, H. G., 1947, "Sociological theory in Industrial Relations", American Sociological Review, vol. 12, pp. 271-278
- ・ , 1969, "Symbolic Interactionism", Prentice-Hall (H・ブルーマー著、後藤将之訳、1991年、『シンボリック相互作用論—パースペクティブと方法—』、劉草書房)
- ・ , 1969b, "Collective Behaviour" in Lee, A. M. (ed.), "Principles of Sociology(3rd. ed.)", Barnes & Noble, pp. 67-122
- ・ , 1975, "Exchange on Turner, "Parsons as a Symbolic Interactionist"", Sociological Inquiry, vol. 45, pp. 59-68
- ・ , 1977, Comment on Lewis, "The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic Interactionism", Sociological Quarterly, vol. 18, pp. 285-289[in Hamilton(ed.), pp. 152-157]
- ・ , 1980, "Mead and Blumer: The Convergent Methodological Perspectives of Social Behaviorism and Symbolic Interactionism" American Sociological Review, vol. 45, pp. 409-419
- ・ , 1990, "Industrialization as an Agent of Social Change; A Critical Analysis" Aldine (片桐雅隆他訳、1995年、『産業化論再考—シンボリック相互作用論の視点から—』、劉草書房)
- ・ , 1993, Athens, H. L., (ed.), "Blumer, s Advanced Course on Social Psychology", Studies in Symbolic Interaction, vol. 14, pp. 163-193
- ・ コーザー, L. A., 磯部卓三訳、1981年、『アメリカ社会学の形成』、アカデミア出版
- ・ Denzin, N. K., 1989, "The Rsearch Act", Prentice-Hall
- ・ 土肥豊、1989年、「子供の社会学—デンジナー」、片桐編、188頁—216頁
- ・ 江原由美子、1986年、「『主体主義』批判の二様相—架場ミード論へのメタ理論的批判—」、今津孝次郎他編、『現代社会学』1986年、vol. 12, No. 1、アカデミ

ア出版、61-70頁

- ・フェアリス, R・E・L 著、奥田道大他訳、1990年、『シカゴソシオロジー：1920-1932』、ハーベスト社
- ・船津衛、1976年、『シンボリック相互作用論』、恒星社厚生閣
- ・1983年、『自我の社会理論』、恒星社厚生閣
- ・1989年、『ミード自我論の研究』、恒星社厚生閣
- ・1990年、「パークとシカゴ学派社会学」、『東北大学文学部研究年報』第40号、15-58頁
- ・1993年、「ブルーマーの社会学とその『人間観』的基礎」、『社会学研究』第60号、東北社会学研究会、45-62頁
- ・1995年、「シンボリック相互作用論の特質」、船津衛・宝月誠編、1995年、『シンボリック相互作用論の世界』、恒星社厚生閣、3-13頁
- ・後藤将之、1991年、「解説：ハーバート・ブルーマーの社会心理学」、H・ブルーマー著、後藤訳、273-314頁
- ・Hamilton, P. (ed), 1992, "George Herbert Mead critical assessment vol.2 section 2, :Mead and Symbolic Interactionism", Routledge
- ・Hammersley, M., 1989, "The Dilemma of Qualitative Method: Herbert Blumer and the Chicago Tradition", Routledge
- ・宝月誠、1984年、「シンボリック相互作用論」、新睦人他編、『社会学のあゆみパートII』、有斐閣、83-108頁
- ・1989年、「シカゴ学派のモノグラフの解釈-E・H・サザランドの作品をテキストにして-」、『社会学史研究』第11号、日本社会学史学会、1-20頁
- ・1990年、「シンボリック相互作用論」、中久郎編、『現代社会学の諸理論』、世界思想社、113-138頁
- ・伊藤勇、1995年、「シンボリック相互作用論における自我・精神論の展開」、船津・宝月編、112-122頁
- ・片桐雅隆、1991年、『変容する日常世界』、世界思想社
- ・1989年、『意味と日常世界』、世界思想社
- ・Lewis, J. D., 1976, "The Classic American Pragmatists as Forerunners to Symbolic

- Interactionism", *Sociological Quarterly*, vol. 17, pp. 347-359 [in Hamilton (ed.), pp. 137-151]
- ・ McPhail, C., and Rexroat, C., 1979, "Mead vs Blumer: the divergent methodological perspectives of social behaviorism and symbolic interactionism" *American Sociological Review* 44, pp. 449-67
 - ・ Maines, D. R., and Morrione, T. J., 1990, "On the Breadth and Relevance of Blumer, s Perspective: Introduction to his Analysis of Industrialization" in Blumer, 1990, pp. xi-xxiv (片桐他訳、1-24頁)
 - ・ マーチンデール, D., 新睦人他訳、1970年、『現代社会学の系譜』(下)、未来社
 - ・ Mead, G. H., 1934, "Mind Self and Society: from the Standpoint of a Social behaviorist" (Morris, C. W., (ed.)), University of Chicago Press (稲葉三千男他訳、1973年、『精神・自我・社会』、青木書店)
 - ・ 1936, "Movements of Thought in the Nineteenth Century" (Moore, M. H., ed.) , University of Chicago Press (魚津郁夫他訳、1994年、『西洋近代思想史』(上・下)、講談社)
 - ・ 1938, "The Philosophy of the Act", (Morris, C. W. (ed.)), University of Chicago Press
 - ・ Morrione, T. J., 1988, "Herbert Blumer (1900-87): A Legacy of Concepts, Criticisms and Contributions", *Symbolic Interaction*, vol. 11, No. 1, pp. 1-12
 - ・ 村井忠政、1974年、「G・H・ミードとシンボリックインタラクショニズム」、『社会学評論』第96号、日本社会学会、44-62頁
 - ・ 那須壽、1995年a、「現代のシンボリック相互作用論者-H・ブルーマー」、船津・宝月編、37-49頁
 - ・ 1995年b、「意味・シンボル・相互作用」、船津・宝月編、89-100頁
 - ・ 小笠原眞、1993年、『理論社会学への誘い-アメリカ社会学史断章-』、有斐閣
 - ・ 佐久間政広、1995年、「個性性と機能分化」、『社会学年報』第24号、東北社会学会、23-41頁
 - ・ 下田直春、1987年、『増補改訂版/社会学的思考の基礎』、新泉社
 - ・ 進藤雄三、1990年、「理解社会学の系譜(B)」、中久郎編、70-96頁

- ・ Smith, D., 1988, "The Chicago School" Macmillan Education
- ・ 田中義久、1971年、「現代社会学における『個人と社会』」、ティリヤキアン, E・A, 著、田中訳、『個人と社会』、みすず書房、313-344頁
- ・ 徳川直人、1993年、「G・H・ミードにおける『ディスコースの世界』の再構成に向けて」、東北社会学会、『社会学年報』XXII、21-38頁
- ・ Turner, J. H., 1974, "Parsons as a Symbolic Interactionist: A Comparison of Action and Interaction Theory" Sociological Inquiry, vol44, pp. 283-294 [in Hamilton (ed.), pp. 102-119]
- ・ 植村貴裕、1989年a、「大衆の社会学—ブルーマー」、片桐編、85-110頁
、1989年b、「『人間関係周期』モデルの再生をめざして—生態学的パースペクティブの潮流—」、『社会学史研究』第11号、日本社会学史学会、85-101頁
- ・ ウォーラス, R., ウルフ, A. 著、濱屋正男他訳、1985年、『現代社会学理論』、新泉社
- ・ Wrong, D. H., 1970, "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology" reprinted in Stone, G. P., and Faberman, H. A., (ed.), "Social Psychology through Symbolic Interaction", Xerox College Publishing, pp. 29-39
- ・ 山崎達彦、1993年、「デュルケム社会学の『人間観』的基礎」、『社会学研究』第60号、東北社会学研究会、63-88頁
- ・ 吉原直樹、1989年、「シカゴ・ソシオロジー再考のために」、『社会学史研究』第11号、日本社会学史学会、21-37頁
、1994年、『都市空間の社会理論』、東京大学出版会